
現代的なもので、ファンタジーを旅する。

とある作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代的なもので、ファンタジーを旅する。

【Zコード】

Z9945X

【作者名】

とある作者

【あらすじ】

いかにも普通な感じにて、現代日本で暮らしていた山崎 真は、
電車から降りた瞬間異世界へ飛ばされます。

一日に、現代的なものを、3つだけ召喚できる力を、わけのわから
らない奴に強制的に持たされてしまった山崎 真は、はたして、ど
のように異世界を旅するのだろうか… そんな物語です。

プロローグ（前書き）

「んにちは、とある作者です。相変わらず文才がない自分がですが、どうもよろしくお願いします。投稿作品は今回で一作目で、できたらもう一作目も見てくれる嬉しいです。基本的にこの小説は作者の気分転換的に書いていることと、作者の家にあるパソコンは、インターネットに繋がっていないと叫ぶ悲劇のせいで、ものいっそ不定期更新です、以下の二点を踏まえてお読みください、それでは、はじまりはじまり

プロローグ

「……」

現在起きてしまった、そんなありえない非現実的な現象に、山崎真は、ついついそんな事を、空しげにつぶやいてしまったのであつた。

目の前には、まさしく、のどかな草原と山々、そして遠くに見える、まるでアルプス山脈のような高々とした山脈が広がっていた。とりあえず彼は何故驚いているのか、おそれくそれは、この言葉を聞いただけでは想像することは難しいであろう。しかし、タイミングよく真は、次の瞬間に「う」と言つた。

「……電車から降りたら、こんな世界が広がつてるとか……可笑しすぎるんだろ」

そう、彼はさつきまで地球の、日本国の、東京にいたのである、しかも電車の中……真は、今日一日中暇なので、暇つぶしに秋葉原にでも行くか、そう思い、自らの家の近くにある最寄りの駅から、秋葉原へ、電車へ行ったのであった、そして、十分後、電車はきちんと

と、それこそ異常なほどぴったりに、秋葉原駅に着いたのである。ここまで問題なかつたはずであった、しかし、問題はそれからであつた。

(…ここまではいいよな)

真は、自らのここまでの行動を確認した後、そのあとびつなつたかを、まるで走馬灯のように思いだしていた。

(電車のドアにはそれまでは、ちゃんと秋葉原駅構内を出口としていたはずだ、俺の記憶がそう言つてゐるのだから間違いないハズ！！)

真はそんな感じに、今までのことと思い出すのに成功した。

(しかし、俺が意氣揚揚と、電車のドアから飛び出した瞬間)

「…きれいな自然の風景だな」

である。

「…どこのラノベ的展開だよ」

山崎真、彼は大の小説好きである、読む本は紙媒体、電子媒体問わずである。もちろん、ラノベだろうが、小説を読もうだろうが、所せましと呼んでいるのである、そんな彼がまつさきにそう思ったのは当然のことかもしれない。

しかし、もちろんそれだけで彼の心が静まるはずもない。

(確かに…確かにさ、自分もラノベ的展開になつてくれて、ハーレムだとか、チートだとかやってみたいとか思ったことがあるよ…！毎日繰り返される日常に飽き飽きてた時もあったわ、だけれど…さすがにこれはないだろ…)

真はそんな感じに半分キレながらもやつ思つた。

「……あれ? ここは異世界だな」

真は、それこそ毎日と呼んでいた、小説を読もうで流行?していた異世界トリップ物を元に直感的にそう思った。

• • • • • • • • •

ひな

しかし、この異世界トリップはないだろ…と彼は思った。

(せめてさ、美少女が俺を観者として召喚してくれたとか、そんな感じだったらしいのに)

真はそう思つたが、もちろん、目の前に召喚用の魔法陣も、召喚師としての美少女もいなかつた。

ひ四

風が、ただただ貫くように吹いてゆくだけだった。

「……ん?なんか違和感が」

真は、お尻に何か張られているような違和感を感じ、自らのおじりを触つてみた。

「…なんで、尻に紙が張られてあるんだよーー。」

なぜか、自らの尻に感触的に紙らしきものが張られていることに気づき、ちょっとばかりイライラしながら、紙を尻から取り外し、なんだこれ？そんな感じに紙を見た。

形状は大学ノートの一ページを荒々しく破いたような感じの紙であつた、もうちょっときれいに破れよー！そう真が思ったが、その紙に何かが書かれてあることに気づき、改めて紙を見つめた。

そこにはこんな事が書かれてあつた。

説明書

- 1、あなたは、異世界へ転移しました。
- 2、それだけでは、つまらないので、あなたは自分の世界で存在していた、もしくは存在している物を、1日に3つだけ、あなたの視界内の何処にでも召喚させる事ができます。
- 3、あと、あなたの精神をちょっと弄くりました。
あなたはこの様に異世界に突然転移しても取り乱したり、パニックも起こしませんし、人を殺してもそれは同じです。

4、あとは、のんびり異世界ライフをおもいつきり楽しんでください。

「・・・はあ？」

そんな感じの、かなりふざけたような内容が、その乱暴に破かれた感じのノートに書かてあった。

「…」

真は、茫然としながら、周りを見渡した。

もちろん見えるのは、彼を今まで色々な、危険やらなんやらから守ってくれた、馴染みのある大都市ではなく、のどかな草原と山々、そして遠くに見える、まるでアルプス山脈のような高々とした山脈…簡単にいえば、ここには人間の形跡も…彼を元の世界のように保護してくれた国、警察、家族もいない。もちろん、知り合にも頼れる人も…

「…」

しかし、真はさうに違ひの意味で茫然としてしまった。なぜなら、そんな、普通の人にとってみれば、狂ってしまいそうな環境に置かれたということを認識してしまったのに、それを何とも感じない、まるで今までそうだったじやないか、という、そんな感じの自分に、茫然としてしまったのである。

「…これから俺はどうすればいいんだ」

ひゅ――――――――

と、風が山脈下り、そして山々、次に近くにある大量にい木々が生
い茂る、森の中を通り、最後に、マコトのいる草原を駆け廻り、真
を、その血ひの風で貫いたあと。

これまた、青々とした、大空に向かつて、溶けていった。

プロローグ（後書き）

感想は、作者を動かす燃料です、（称賛、批判等問わず）どうか燃料の補給をよろしくお願いします。

とりあえずの現状確認

「・・・さて、どうするか」

真はこんな状況下に置かれてもなお、何も感じず、落ち着いている自分を恨みながらそうつぶやいた。

今まで真は、何で尻にこんな大事な物張るんだよ、絶対これ張った奴は悪意あるだろとか、誰なんだよ俺にこの手紙を書いたやつは！！とか、そんな愚痴を永遠と言っていたが、そんなこと言つても状況は打開するはずもなく、結局真は愚痴を言つのも止めて、現実的にこれからどうするればいいのか考えないければならないと思いついたのだつた。

まず、真は自分が持つてゐる物を確認した。

ナップザックに、その中にある物として、メモ帳、筆箱、その中にあるシャーペン5本、マーカーペン一本、ネームペ恩一本、蛍光ペン、赤、青、黄色、緑、金色の5本、鉛筆3本、消しゴム2個、20?物差し一個、コンパス1個、ハサミ一個、修正ペ恩一個、560円区間の切符、財布、携帯電話（もちろん圈外）、そしてその中にある5000円札と小銭として568円が有るのみであった。

「…まあ、秋葉原に遊びに行くだけだし、これぐらいしか持つてきてないのは当たり前か」

真は自分の持ち物の確認を終えた後、とりあえずナップザックを置きこいつ呟いた。

「次に、ここがどんな異世界かだ」
真はまず、そのことについて考えた。

(まづ異世界にといつても色々ある、剣と魔法の世界、技術が異様に発達した世界、魔法と科学の世界だとかだな)

その時一瞬、真は、ここには人間もない、ただ豊かな自然だけが広がる世界かもしれないと思つたが、それはないとなぜか納得していた。

なぜなら展開的にそれはないだろうと、いままで読んできた小説を元にそう思つたのである。

最もそうでもない可能性もあるのだが・・・

そんな考えを、真はあまり考えないようにした。

(・・・こればかりは調べてみるしかないな)

目の前にある風景だけで、ここがどんな世界のかなんて分かるわけもなく、こればかりは現地で調べてみるしかない、真はそう思い、このことについてはとりあえず保留ということにして置くことにしたのであつた。

次に、この世界の言葉やら、言語の問題について、

大体このパターンでは、補正がついて言葉言語、両方とも何故か理解できるか、もしくは言葉が通じて、言語を書く、もしくは読むことはできないかである。

しかし、このことについても、同じく確かめようもないでの、真はまた保留にすることにした。

後は、召喚について

手紙には、真の世界、つまり地球に存在しているか、もしくはして
いた物を一日に3つだけ、召喚できると書かれてある、一日に3つ
だけとはいえ、つまりこれは、真の世界に存在している道具はもち
ろん、昔は存在していた物までも召喚できることを意味している。

また、なんでも召喚できるところから…それこそ、10円の「うまい棒」から、戦艦大和まで召喚できることになってしまつ…。もつとも、大和なんて召喚しても、操縦なんてできないから意味なし、同じことは航空機や戦車にも言える。

しかし、真はそのことから…とある究極の攻撃ができてしまつと言つ、考えにたどり着いたのであつた。

「…同じことは核爆弾も召喚できるとこ「うまい棒」が

（視界内のどこにでもだから、リトルボーイなんかを上空のどつかにでも召喚すれば、簡単に核攻撃できる…やばい…これはチートだぜ…）

真はそう思つたが、しかし、

（…と言つても、日本人としてはさすがにそんな攻撃はしたくないけど）

唯一の被爆国の人である真がそう思つたのは当然のことであつた。

（わざと、今の所その必要性もないし、これは最終手段としてひとつおこう）

真はそう思い、次に、召喚できる1個の単位について考えてみた。

たとえば、飴をなめたいと思った時、たった一粒の飴玉しか召喚できないのか、それとも飴玉の袋」という一個の範囲で、大量に飴玉を召喚できるかどうかである。

(「これから食糧についてのこともあるし…ぜひとも後者であつてほしいが…これは実際に召喚してみなければ分からぬしな…）
それに、一日に召喚できるものは三つしかない、これは慎重にやらなくては…無駄遣いはできない…

結局真は、このことも、この世界について調べながら考へることにした。

次に武装

武装については、簡単に決まった、真の世界で、何とかやり方も本で分かっていて、初心者でも扱えて、なおかつ威力があるものと言つたら拳銃しかないのであった。

(明らかに、身を守るにも必要だし、俺をここに転移させたやつの性格から考えると、あまり治安のよそうな世界ではないはずだ)

それに本当にちゃんと召喚できるか確かめる必要もあるしな…

真は考えに考えそう思い、最初に召喚するものとして、真は銃にはあまり詳しくないが、たしか、H & amp; K J S Pとか言う銃が、初心者でも扱えて、なおかつ結構な威力があると、どこかの小説にでも書かれてあつたことを思いだし、それを召喚することにした。

「…具体的にどう召喚すればいいんだろう」

手紙にはそういうことは全く書かれていなかつたし、どうすればいいのだろうか

真は、そう迷いながら、いつなつたら適当にやつてみよつと思ひ、真はさつそく実行することにした。

「召喚！…」

「・・・」

反応はなかつた…

「山崎真が告げる、H&K U.S.Pを召喚せよ！…」

真は、もしかしたらもうちょっと具体的に言わなくてはいけないのか？ そう考へ、今度は、はつきりと、アニメとかで見た魔法使いが言つていた呪文みたいに叫けび、なおかつ、召喚するものをイメージしながら叫んだ。

そのことが功をそつしたのだろうか、突然「バツ！」という乾いた音ともにまさしく物理法則に真つ向つからケンカを売るがごとく、突然、拳銃・・・H&K U.S.Pが忽然と、真の足元に現れたのである。

「・・・すげーな」

一体どういう仕組みなのか、検討もつかないが、初めて見る光景に高揚感感じていた。

（とりあえず、召喚の仕方は分かつた、自分の名前と召喚する者の名所を言い、なおかつ、召喚するものをイメージすればいいのか）

真はそう思いながら、足元にあるH&K U.S.P（以下拳銃）を掴んでみた、しかしその瞬間、真は驚くべきものを目にすることに

なつた。

「ブン」

「のはー！」

拳銃をつかんだ瞬間、機械的な音とともに、真の目の前によく、R PGとかで使われるウインドウが突然、いかにも未来的な感じに立体的に表れたのである。

真は何とか冷静になりながらも、一応、そのウインドウ?に書かれてあるものを読んでみた。

山崎 真 十七歳 桜坂高等学校2年生

レベル1
種族 人間

装備	現在地	魔法技	武術技	祝福	特性	称号	精神力	防御力	攻撃力	魔力	M	H	P
H&K	ハーストリア帝国	なし	なし	なし	なし	異世界召喚師	1000	1	1	0	0	10	0

1867年

道具 ナップザック

次のレベルまであと、100

残り召喚数 2

「……なんだこれ？」

真は突然現れたウインドウとともに、そこに書かれてあつたもの唾
然とした。

（つまりこれは、なんだ？俺のステータスって奴？）

一様、真はRPG物も少々やつたことがあるので、直感的にそう思
つたのであつた。

「……」

真はもう一度ウインドウに目をやつた。

（…俺のレベルが1で、HPが10、魔力とMPなんかが0、攻
撃と防御が1、明らかに可笑しい精神力1000…まあこれは…お
そらく謎の奴が精神をいじくつたという影響だということはわかる
が…それに、この世界の基本的な数値がわからないから、俺が強い
のか、それとも弱いのか分からなくな…）

真は自らの数値を見ながらそんな感想を抱いた。

「……はあー」

しかし真は、何故だか分からぬが、直感的に、おそらく自分は弱
いだろうと思っていた、レベル1だし…あとは魔法技とか祝福なん
て言うよく分からぬものもあるが、一体、これはどういったもの

なのか、真にはさっぱりわからないので保留するしかなかった、まあ、悲しいことに、真にはどれもなしだから関係ないが。

(…異世界召喚師とか言う称号は、おそらくおれの世界から武器なんかを召喚できる能力のことだらうとここと位は、俺にでもわかる、種族が人間ということも、道具にナップザックも、装備が指すのはこの拳銃だといふことも分かる、じゃあ、特性の近代兵器操作術1867年は一体何なんだ…)

真は自分のステータスの中で、近代兵器操作術という手紙にも書いてなかつた物にチートとなれるかもしれないと言つ期待を含みながら、一体これはどうこつたものなのかなを考えていた。

(…これはもしかしたら、俺が近代兵器を扱えるとかじゃないか？某使い魔のガンドー ブみたいに)

真は、心の底からそのことに喜びながらも、しかし、自らが拳銃を握つていても、拳銃の詳しい使い方が頭に流れ込んでくるとかいうことはなかつた。

(…違うのか…俺が近代兵器を扱うことができないとでも言つのか…いや待てよ考えろ)

真は特性の欄内にある、近代兵器操作術の横の、1867年という数字に注目した。

(…これつて、俺の世界の西暦ほくないか？横に年とか書いてあるし)

そのことに真は気づき、そしてそのことの意味に気づいた。

(…ツ！…これはもしかして、使える兵器の年代じゃないのか？たとえばこれは、1867年までに開発された兵器が使えることが示し、そしてそれ以降に開発された兵器は扱うことができないといこ

とかーーー

なるほど…そういう事か、と真は納得すると同時に、じゃあこの拳銃召喚した意味ほとんどなくね?とも思つたが、今更返品などできるはずもなく、まさか捨てるのももったいないので、そのまま持つていることにした。

(また召喚するにしてももったいないし、またあとで考えよつ
真は思った。

(…とりあえず…近代兵器操作術というのはどうこうのかは分かつた、次に、現在地?についてだ)

真は、今度ウインドウの現在地の欄について注目した。

(ハーストリア帝国? オーストリアと名前が似ているが…気のせいか?)

真は自分の世界にある国の中前にちょっとばかり似ているハーストリア帝国が一体どのような国なのか、そしてもしかしたらあるかも知れないオーストリアとの関連性についても考えた。

(…だめだ、ちつともこの世界が結局どうこつた世界なのかは分からない)

唯一ステータスから分かるのは、魔法力や、魔力、魔法技などから、この世界には魔法があること位は分かるが、聖徳太子でも、東大卒でもないただの高校生の真が、たつたそれだけの情報で、この世界のことが、分かるはずもなかつた。

(…とつあえず、ステータスの種族なんかがあることから、ファンタジーな世界かも知れないし、そうでなくても、人間なんかは絶対いるだろつ、とつあえず、道やら町やらなんかを探してみるか)

精神をいじくられたことにより、あまり緊張感を感じなくなつた真は、冷静にそうまとめることができ、とりあえず、そこらに人のいる場所は有るか無いかを探しながら、ステータスの事やら、異世召還師を使っての新たな攻撃も考えながら、歩くことにした。

(…とりあえずステータスをいつたん消すか)

真は一瞬ステータスはどうやつたら消すことができるのか迷つたが、消えろと念じれば消えたので、試しにまた表れると念じたら表れたので、とりあえず大体のステータスの操り方は分かつたのであつた。

「…さて…一樣憧れだつた異世界を放浪する旅を、始めるとしますか、」

真はそう呟き、元の世界の東京とは比べ物にならないくらいの、大自然に、一様、足を踏み入れたのであつた。

とりあえずの現状確認（後書き）

だめだ…これを書いただけで燃料が底をついた…小説を書くって本当に大変だな。

だれか…感想をくれたら嬉しいな…

後、1867年は大政奉還の年です、自分としては、近代兵器の始まりと言つたらここから辺だと思ったからです。そしてなぜわざわざ使える兵器に制限を課したというと、いきなり90式戦車やら、F22使って無双しても、面白くないからです。やっぱりだんだん強くなつっていくのがいいな。

…できれば、助言とかもほしいです…

「ノフリンを拳銃で倒す話（前書き）

至極簡単な登場人物紹介

山？ 真 十七歳 桜坂高等学校生

秋葉に遊びに行つたら不意打ちにもほどがあるような感じに電車から降りたら異世界へ飛ばされた人、人によつて意見は分かれるかわいそうな人、または運のいい人、どうやら謎の人物に遊び感覚で異世界に転移させられたようで、その証拠に手紙が置いてあつた、一応強制的に貰われた能力である、異世界召喚師の力を持つている。これはマコトが居た世界において、存在している物、もしくは存在していたものを召喚できる能力である。哀れ、真はこの能力で異世界を旅していくこととなる。

趣味は読書 特技は読書 得意技は読書 得意教科は読書である。
まあとりあえず読書が好きな奴である。

一応、この物語の主人公である。

「ハリーンを拳銃で倒す話

「」はヨネハの森、ハーストリア王国にある結構な規模の森である。

そんな森の中を走っている17歳位の少女がいた。

「はつ…はつ」

まるで川のように流れるような、そのうえ、水滴がこぼれそうなくらい美しい水色のロングヘアに、美しい水色の瞳、鈴のが鳴るかのような、きれいな声、そして、雪のようにきめ細やかな肌…如何にもその姿は、ラノベのヒロインを具現化したような…まあ、簡単にいえば、超のつく美少女であった。

「はつ…はつ」「

しかし、その美少女には、似つかわしくない物があった。

「はつ…はつ…痛い…痛いよ」

彼女がそう叫びながら手で押さえる場所をよく見てみると、足の肘に生々しい傷跡があったのである、しかも、ずいぶん放置していたのか、膿んでもいる。

「…う…痛いよ…」

少女の体を今一度良く見ていると、先ほどの傷程ではないにせよ、あちら此方に擦り傷の跡があった。

「はつ…はつだめ…疲れた」

少女は体を極限にまで酷使した様で、その影響からか、倒れこんでしまった。

「はい……まあ……ぐすん…」

少女はいつの間にか、忘れていた涙を、思い出したかのように流しだし始めた。

「う……う…」

少女は泣きながら、じりじり歩いていた。

「助けてよ……誰か…」

「……………」

しかし、そんなことを言つていても、こんな森の中に、都合よく人がいるはずもなく……ただその少女の声は、誰の耳に歩留かず、ただいたずらに、森の中へ溶けていくだけであった。

「う……う……ぐすん」

少女はまた、激痛が走る左足を引きずりながら、とぼとぼと歩き始めた。

「……なんだあれ？」

もちろん真はそんな少女の存在など知る由もなく、彼もまたヨネハの森を絶賛探検中であった。

さて、おそらく誰もがこの言葉を聞いただけでは、真が何を見てしまったのかは分からぬだろ？

しかし、真はまるで、そんな空氣を読むがごとく、ちよつといタイミミングで自らが遭遇してしまったものを言つてくれた。

「…ゴブリンだよな…あれ、絶対」

真は一様、見つからないために、すぐそばにあった木の陰に隠れながら、RPGの常連ともいうべきモンスターの名前を言つた。

奇妙な長い耳、人間の鼻の3倍ぐらいでデカイ鼻、四本の指、一応ボロボロの赤い洋服服を着ていて、武装として、はこぼれを起こしている剣を持っていた。

(…どうする)

真はそう思しながらゴブリンを見つめる。
幸いにもゴブリンは真の存在に気付いている様子はなく、のんびりボケーとしながら、とこと歩いていた。

(ここは異世界だし、ゴブリンがいても別に不思議ではない、いや、むしろそれは当然のことかもしれない、しかし、どうするか…)

真が読んだ小説の中で登場するゴブリンは、大体は害のある雑魚モンスターとして登場するが、中には種族として、人間と共に暮らしていると言う設定の小説もあつたため、そして、一応日本人としての感性はある謎の人物からの攻撃？から逃れたのか、ちゃんと残つており、そのため真は、いきなり出会いがしらにゴブリンを殺すことを躊躇していたのであった。

(…マジでどうしよう、アイツが居るんじゃ、向こう側に行けな

いじやないか)

実は真は、これまで何の目的もなくフラフラしていたわけでもない、ちゃんと森の中を歩きながら、川を探していたのである。

何故かと聞かれれば、川を見つけて下れば、もしかしたら人間の暮らしている町につけるかもしれないという希望的観測にしたがって、真は、川を絶賛探していたのである。

そして、2時間探して、ようやく川を見つけたのだが、そこにとうせんぼうするが」とぐ、ゴブリンが居たのである。

「…あ！ そうだ」

突然真は何か思いついたらしく、ゴブリンに気づかれないよう、そつづぶやいた。

25

「…
「ブン」

真はもしかしたら、さつきのウインドウみたいに、ゴブリンのステータスを念じれば見れるかも知れないと思い、さっそくあのゴブリンのステータス現れろ！！てな感じにやってみた、そしたら案の定、ゴブリンのステータスが真の目の前にこれ又忽然と表示された。

ゴブリン

レベル5

初級モンスター

HP 30
MP 0

魔力	0
攻撃力	14
防御力	12
精神力	23
称号	なし
武術技	拾つた剣を振り下ろす、ゴブリンパンチ
魔法技	なし
現在地	ハーストリア帝国 ヨネハの森林地帯
装備	はこぼれを起こした剣
道具	ぼろぼろの赤い服

次のレベルまで ???

(…ゴブリン俺より強え————！)

ステータスを見て、レベルが俺より上だし、攻撃力、防御力共に、明らかに真より強かつたのであった。

(やつぱり俺つて、初級モンスターとか言つゴブリンより弱いと言つことなか…)

真はその事実に落胆しながらそう思った。

(…まあそれは仕方ないかな：俺は別に運動しているわけでもなく、帰宅部だし、剣を余裕で振り回すゴブリンよりか弱いのは当然のことかもしれないし）

しかし、そんなことを気にしていても川には渡れない、とりあえずこの「ゴブリンをどうするか」を決めなくてはならなかつた。

(…こうなつたら、迂回するか、別にここを通らなくては川に行けないわけでもないし、無駄な争いは嫌だし、それに拳銃の弾だつ

てもつたいたない、ここは逃げるのが一番だな）

真はそんな感じで、迂回して川を田指すことに決定すると、さひぐくそれを実行しようと思つて、ゴブリンから一歩離れたよつとしたその時――

「からん、からららん」

「…やべ」

ついつい、勢い余つて、石を蹴つてしまつといつ、ありがちな展開を起こしてしまつたのであつた。

「…」

真はゴブリンの方向を恐る恐るゆづくづとむいてみた。
そしてそこには、そんなドジなことをやつてしまつた、真の姿を確認し、凝視するゴブリンの姿があつたのであつた。

「…ハロー、今日もいい天気ですね」

真はこのゴブリンが、もしかしたら人間にやせこじゴブリンだといふことを祈りながら、そして、苦笑いを行ながら、そつ言つた。

しかし、世の中日本の景氣のよつて、うまくいかないのが常のように、真もまた、運に見放されたのであつた。

「あや――――――」

そんな、真めがけて、ゴブリンが奇声を上げながら、なおかつ剣を振りかざし、真に迫つたのだつた。

「はあー、不運だぜこれは――」

しかし真はいたつて冷静だった、おそれく精神を弄られたからである、真もそのひとときづきながらも、皮肉げに呟いた。

「本当に不運だぜここんちくしょ！…」

真は銃など撃つたどころか、触ったことすらないのだが、精神が弄られた影響か、なんの問題もなく拳銃をゴブリンに構える。

「…魔法や剣ではなく、銃でゴブリンと戦つ俺つて、なんだか可笑しくね？」

何気なく真はそんなことを思いながらも、躊躇なく、引き金を引いた。

「ダン…！」

と、乾いた音が、森の中を響き渡った。

真は銃をもちろん撃つたこともなく、しかも、彼の今まで読んだ本に拳銃の使い方が書かれてあつた物があつたからこそ、キチンと打てるというありさまである。さらに、H & K U S P A は 1867 年以降に開発されたものであり、補正も効かないでの、例え撃つたとしても命中率が最悪なはずであった、しかし、しかしである。

いわゆる真には、精神を弄られたおかげで、銃初心者によくある、恐怖心が全くなく、また、実戦のような極限状態に置かれてまつたくもつて冷静であつたし、撃つと決めれば、それこそプロの兵隊のように、躊躇なく打つことができた。

しかも、ゴブリンの目には、真は全く武器らしき物を身につけていないと映つたのか、何も考えず、ただ単に自らが持つている剣で簡単に殺せると思い、ただ悠々と、完全に油断しながら、真に向かつて走つて行くだけであった。

そして、それらの要素が重なつたうえ、どうやら運も良かつたのか、拳銃の弾は見事、ゴブリンの頭を貫いていたのであった。

「ぎゃ…」

そんな断末魔を「ゴブリンは叫び、頭から赤い血を流しながら、ビヤーと倒れ伏せ、そのまま動かなくなつた。

「…銃を撃つても…そしてゴブリンみたいな人間に近い姿をした生き物を殺しても…何の罪悪感も湧かないとか…俺…おかしくねーか…」

人並みの大きさの生物を殺したにもかかわらず、そして何の躊躇もなく銃を撃つことを出来たそんな自分に、真は嫌悪感を感じ、銃を持つている右手をだらーんと垂らしながら、暗い気持ちで、とぼとぼと、頭部を撃ち抜かれたゴブリンの死体の横を歩き、川に向かつた…。

「りーん、りーん、りーん」

「…だめだ、とても今日中に、人間のいそなう町に着くことなど、不可能だな」

真はあるの後、川を下り、人間の町にたどりつくこと祈りながら、敗残兵が撤退するみたいに、とぼとぼと川沿いを下つたのであつた、幸いにも川の大きさが広いためか、川の隅は木などの障害物もなく、小石のみだったので、森のなかよりも断然歩きやすく、また、ゴブリンのようなモンスターにも会つことなどもなかつた。

しかし、どうやら真はそう言つた事に恵まれながらも、結局は人間の町に辿り着くことができないまま、夜を迎えてしまつたのであつた。

「……月が5つもあるな……」

異世界で定番の大量にある円を見ながら、真はそつそつぶやくのであった。これもまた精神が弄られたためか、そして月が5つもあっても何故か明るさは元の世界と変わらないためか、別に取り乱すこともなく、のんびりと大量にある円を見ながら、そう呟くのであった。

「……川で、野宿するしかないか」

はあー、と、ため息をつきながら、そう呟いた。

しかし、真はそんな現代日本の……悪く言えば毎日ベッドで寝るのが当たり前なおぼっちゃまである、川の川についた岩の上で寝られるほど、真の体がしつかりとしているはずもない。

「……ぐ~」

それに腹も減っていたのであった。

「はあー、とつあえず何か召喚しないと、特に今日は例年になく歩き回つたせいで、いつもに増して腹が減つたしな……」

というわけで真は、さっそく何を召喚すればいいのかを決めることにした。

「……これはよく考えなけば……いつたい何を召喚すればちゃんとしたねどこも得るものもでき、なおかつ、食料を手に入れることができるかだ……」

「……うーん、と、真は考える人みたいに、頭を抱えながら、なにかそういう言つたものを一気に召喚できる道があるはずだと思い、自らの記憶を探つて行つた。

「……そうだ……3カ月前ぐらいに、確か家族で、キャンプをした

時があつたな、そしてその時の持ち物の中に、寝袋と、携行用のガスコンロと、小さなヤカンみたいな食器などと、10個ぐらいのガッパーメン入った、段ボールがあつたはずだ…存在していたもの、つまり、今現在存在していない物でも召喚できるのなら、そういうのだって召喚できるはず」

真は、そのことを思い出した自分に感心しながら、さっそく召喚して見ることにした。

(…どうか、召喚できますよ!)

真はそんなことを思いながらも、とりあえず必要かどうかは知らないが、よくわからない、召喚の構え?をした。

「…山崎真が告げる、キャンプ行つた時にあつた、引っ越しのサカイのマークのある段ボール箱を召喚せよ!…」

すいぶん適当な感じに言つてしまつたが、いくらなんでもそこまで詳細に思い出すことなどできるはずもなく、ただ、抜本的にそういうしかなかったのである。

しかし、どうやら真はちゃんとその段ボール箱の特徴を頭の中でイメージできたお陰か、「バ!!」という乾いた音と共に、真の目の前に忽然と、ワープしてきたかのように、引っ越しのサカイ印の段ボール箱が表れたのであった。

「…やべ、便利だわこの能力」

真は、素直にそんな感想抱いたのであった。

「ハーリンを拳銃で倒す話（後書き）

自分の作品を評価していくぞった皆様、お氣に入りに登録してください
そつた皆様、本当にありがとうございます。

これからも、自分の作品をぜひ楽しんでください。

よくある美少女を助ける話（前書き）

至極簡単な、武器説明

H & K U.S.P

ドイツの銃器メーカーである、ベックラー & コッホ（H & Kとはこれを省略したものである）と呼ばれる会社が開発した自動拳銃である。

別名ハ8と呼ばれている。

ハーフハーフ詳しく述べは… 各皿で検索と並んでいます。

よくある美少女を助ける話

「…」

「パチツ…パチツ」

「…まさか、暇つぶしに秋葉に行つただけなのに、今はこうして異世界でたき火を炊いて、カツプラーメン食つてるとか…世の中どんなことがあこるか想像もできませんな」

自らが焚いた焚き火に照らされながら、真はもっともらしいことを、5つもある月をみながら、お月見の如くカツプラーメンを食べながらそう言つた。

「…カツプラーメンで、なんで家で食つよつ、こつしてキャンプ

的な感じで食べる方がうまいんだる」

そんな永遠の謎を、真は暇つぶし的に呟くのだった。

ちなみに真がなぜに焚火などを焚いてるのかと言つと、一重に塞かつたからである。

「…気温14度、昼は明らかに20度以上ぐらにはあつたはずなのだが…これは寒すぎだろ」

段ボールの中に、何故かおまけ的に入つていた気温計を見ながら、今までの気温との、あり得ないほどの落差に、ため息をつきながら、そう思つのであった。

「…」

携行用のガスコンロで、ヤカンの中身が、ぐつぐつとお湯が沸いている様子を見ながら、真はこれからのことどうすればいいのか、考えていた。

「…とつあえずは、当面の目標は、人に会うことだ、幸いこの世界がおそらくファンタジーな世界であることだけは、さつきのゴブリンの件で、証明済みだ」

可能性としては98%ぐらいかな？ 真はそんなことを思い、次に元の世界に戻れるかどうかについて考え始めた。

「…大抵の異世界トリップ物の小説は…かなりの確率で、そここの住民になつたり、自ら進んで住民になることを決意したりして、そのまま元の世界に帰らないまま、ファンタジーの世界でハッピーエンド、といつ感じで終わるから…俺もそうなるかもしれん」

真は、自らが読んでいた異世界トリップ物の本についての最終的展開を思い出しながらそう思った。

(…しかし、俺としては、元の世界に帰りたいよな、確かにこの能力は凄まじいほど便利だけど、やっぱり家族も友人もいて、そしてのんびりと平和に暮らしていた今までの日常の方が断然いい、一応、最終目標として、元の世界にすることを目標として掲げるか…)

真はそう思い、自らの目標は元の世界に帰ることだといつことを改めて決意し、同時に如何にして帰れるかを考えていた。

(…もしかしたら、この世界には、異世界を渡る魔法とかもあるかもしがれない、今はそれに頼るしかないな…)

しかし、浮かんだのはそんな希望的観測な物だけであった。

「はあー、もしレベルが上がつてそんなの出来るようになつたらうれしいんだけど…いや待てよ、レベル？」

真は、そう言えば、もしかしたら自分のレベル、先ほどの「プリンを倒したことにより、アップしているかもしれないと思い、すぐさま、自らのウインドウを急いで開いてみた。

山崎 真 十七歳 桜坂高等学校二年生

レベル2
種族 人間

	HP	MP	MP	HP
魔力	0	0	0	15
攻撃力	3	4	4	防御力
精神力	1000	1000	1000	魔力

称号	異世界召喚師
特性	近代兵器操作術 1868年

魔法技	なし
武術技	なし
祝福	なし
魔力	なし
現在地	ハーストリア帝国 ゲベラルの川の畔
装備	H & K U S P (9mm弾モデル) 残り弾数14
道具	ナップザック 食べかけのカツプヌードル 木のはし、携行用ガスコンロ 他

次のレベルまであと、 87

残り召喚数 1

「…」これは…もしや…

真は単にレベルが上がったことより、あるものが上がったことに歓喜していた。

「近代兵器操作術が、1867年から、1868年に上がつてい

る！！

真は、つい持っていた食べかけのカップヌードルを零し掛けるほど、歓喜したのであった。

（「これは…ものすごい発見だぜ、ホントマジで、もしかしてレベルが↑上がるごとに、近代兵器操作術も一年単位で、上がつていくのではないか？）

レベルが↑上がったことにより、近代兵器操作術が一年上がったことが証拠だと、真は思つた。

「……だとしたら…ホント素晴らしいな！！」

これなら、地道にレベル上げをしていけば、最終的に、現代の兵器を操縦することが可能となることを、真はそれこそ踊つてみたくなるほど歓喜しながら、確信したのであった。

「…」

少女は意識がはつきりしていなか、半ば無意識と言つてもいい感じに、真が焚く焚き火へと、まるで電灯に集まる虫の「」とく、吸いこまれるようになフランフランと、歩いて行つた。

「…はい？」

真は目の前で起きた出来事に、完全に、それこそ日本軍のカミカゼの攻撃にショックを受けた米軍の「」とく、目の前の出来事が信じきれないような感じに、そう呟いたのであつた。

なぜ真がそのようなことを言つのか、それは一重に二重に三重にとどあつた

「…いきなり森の中から青髪の美少女が表れたかと思つたら、いきなりその少女が俺の目の前で倒れ伏せるつて、どんなフラグ？」

そう、真の目の前には、長距離走に力を使い果たしたようにいきなり森から表れたと思つたら、これまたいきなり倒れ伏せた超のつく美少女が居たのであつた。しかもただの美少女ではない、来ている服も、何故だかぼろぼろであった。

「…」

とりあえず、真はおそるおそる、一応、なにやら苦しそうだったの
で、放つておけるはずもなく、このいきなり倒れ伏せた彼女の体を
調べてみた。読者の諸君、真は別にやましいことをしたいのではな
いのだよ、ただ彼女の体を見るだけ…残念ながらやましいな…

「…げ」

一応、精神を弄られたとしても、このような美少女の体を調べるの
はものすごく恥ずかしいのか、顔を赤めらせながら、彼は倒れてい
る彼女を、現状のような伏せていい体制ではなく、キチンとした仰
向けの体制で寝かしてみることにした、すると…

「…隨分と生々しい傷跡だな」

真の見つめる足の肘には、彼女のきめ細やかな白い肌には、まつた
くもつて似つかわしくない、今もなお、血を流し続けている、生々
しい傷跡であったのである、しかも、長時間ほつたらかしにしてあ
つた影響か、膿んでもいる、それにこの怪我ほどでもないが、他に
も少女の体の所々に切り傷などがあった。

「…こいつは手当するしかないよな」

世界的にもお人好しの日本人、その上大のラノベファンである真は、
当然のことながら、少女を助けるために即座に行動するのであった。

(もつたいないが、医療器具を召喚するか…いや医療器具とい
つても、この一般ピープルな俺にでもできるような治療法だなんて、
あんまりないんだけどな…)

しかし、まあ、そんな一般人にも簡単にできそうな治療でも、や
らないよりかはマシである、そう思つた真は、さっそく召喚の構え
?に入った、

「山崎真が告げる、俺の部屋にある、救急箱を召喚せよ……」

美少女助ける」とも手伝つてか、わざわざ仮面ライダーの変身を決めた時のような…そんなポーズを態々しながらそう叫ぶ彼…今の彼の姿は中二病にしか見えないのは作者だけなのだろうか。

しかしまあ、そんな振り付け関係なく、きちんと、それこそわが社は宅配を必ず時間ちょうどに完璧に届けてあげます、とか、そんなよくわからない例えの「」とく。田の前に真の部屋にあつた救急箱が召喚されたのであった。

「… わて、やつますか」

召喚された救急箱を見ながら、山崎真はそう呟いた。

ちなみに、寝袋が一つしかないと言つ悲劇に気付くのは、この少女の治療が終わつてからのことであった。

5つもある用がだんだんと薄くなり、異世界に、朝日が差し込んでくるのを、真は涙を流しながら、そんな美しい光景を見つめていた。

結局彼は、こんな怪我を負つた美少女をそのまんま石の上で寝かしておけるはずもなく、自らが使う予定であつた寝袋を少女に使わせてあげたのであった。

その反動とも言つべきか、もちろん寝袋は一つしかなく、必然的に彼は固いじつじつとした石の上で寝ることとなつたのである。しかし勿論のこと、石の上で真が寝られるはずもなく、しょうがないので、近くの森の中についた草木を抜き取り、下に引くことによつて、石のじつじつした感触を和らげようとしたのだが、焼け石に水とはこのこと、そして日銀の円相場介入のことく、まったく効果がなかつた。しかし、かと言つて焚火から離れた寒く、そして暗い森の中で寝れるはずもなく、結局真は不幸にも、一日中起きていたのであつた。

「…」

それと彼を苦しめる要素がもう一つあつた。

それはなにか、簡単なことである…田の前に無防備な超絶美少女が居るからであつた。

「…」

しかし、別に田の前に美少女が居たから、自らの男の本能を抑えるのに苦労したからではなく、別に意味の…そのような美少女が居ても、あんまりにも感じない自分が居たことに真は苦しんでいたのであつた。

「…ついに俺は男としての本能まで失つたか…こんな無防備な美少女が目の前にいるのに、近づいても精々顔が赤くなるだけだなんて

…」

ひゅ――――――――――――――――――――

まだ夜の寒さを残しているような風が、真を貫いたのであつた。

「…」

真は少女の顔を見つめた。

夜の時も、もはや神に愛されまくっているのかと思うほどの造形美で雪のように白く、きめ細やかな顔は、焚火にあやしく照られ、まるで焚火の明かりそのものが彼女の装飾品かのように彼女を美しく仕立て上げていたが、いまはそれ以上の美しい朝日が、彼女を照らし上げ、ただでさえ美しいのにさらに美しくしてなつてしまふと言つ悪循環？があり、普通の男なら直視できないか襲つちゃいそうになつちやうほど美しかったのだが…

「…だめだ、精々クラスのかわいい女の子を見つめている程度にしかならない…」

悲しいことに、精神を弄られてしまった真には、それ位にしか感じていなかつたのであつた。それと同時に、こんな如何にもラノベ的展開になつてゐるにもかかわらず、そんな風にしか思わない自分に、真は悲しくなつてきたのであつた…

「…そうだ、彼女のステータス、まだ見てなかつたな」

真はそのことを思い出し、彼女のステータスをこつそり見ることにしてみた、べつべつにやましいことではない、この世界の人間の平均的な身体能力？を見てみるだけだと、真はだれもいないのにそんな言い訳を思つていた。

? ? ? ? ? ? ? ? 17歳 ? ? ? ? ?

レベル26

種族 人間？

異常状態 身体の破損

HP	10 / 100
MP	10 / 1000
魔力	データがロックされています

攻撃力	18
防御力	23
精神力	12
称号	データが破損しています
特性	天才
祝福	データが破損しています
武術技	なし
魔法技	ファイアボール 探索マジック エレキビーム 他
現在地	ハーストリア帝国 ゲベラルの川の畔
武装	なし
装備	ボロボロの白いワンピース、ボロボロの赤いスカート 他

次のレベルまであと、データがロックされています

「… なにこれ？」

真はそんな突込みどころ満載の、わけのわからないステータスを見ながら、そう呟かざる負えなかつたのであつた。

少女の正体

「…」これはいつたいどういう意味だ

真はデータが損傷しているとか、訳の分からないことが書かれてあるこの少女のステータスを見ながら、頭に？を浮かべていた。

（…あれか？この少女はラノベに有りがちな、謎の美少女とか、そんな感じな奴なのか？）

真は自分が今まで読んでいた本を元に、シャーロックホームズの劣化版みたいな感じにそう推理したのであった。

「…」

真はちょっとした沈黙の後、この少女の寝顔をもう一度食い見るような感じで見つめた。

（…だけどここはファンタジーな世界だから、他のパターンとして、この子が逃走中のお姫様とか、奴隸商人から逃げ出してきたとか、モンスターに襲われて逃げだしていたら、いつの間にか迷子になつて、焚火の光と俺の声を聞きつけてやつて來たとか、そういう展開もありそうだな）

そんなふうに一応、これから起こりそうなことを予想するため、ファンタジーにありがちなパターンのことを考えながら、真は、少女が目覚めるのを待つてゐるのだった。

「…起きねーな」

真がファンタジーにありがちなことを考えていた頃から、1時間くらいいたつたころ、真はたまらずそう呟いた。

現代日本なら暇つぶしにゲームやら、本などがあるため、これぐらいの時間ぐらい直ぐにたつてしまうのだが、残念ながらここは異世界である、そんなものは存在しない、真もこの一時間、何度ゲームとかを本当に暇つぶしのために召喚しようかと思ったのだが、ようやく日の出とともに一気に回復した、3つしかない貴重な召喚数を無駄にはできないので、結局焚火に温まりながら、待っているしか、なかつたのであった。

「…おーい、死んでるのか?」

息をしてこるのでから当然のじとく生きてこむ少女に向かつて、真は冗談げにそう言つた。

「…おーいお姫様、起きてください」

真は少女の寝顔の前で手を振りながら起きるよつて痴してみた。

「…すぴー…すぴー」

相変わらずそんかわいらしい寝息を発しながら、真の声などまったく聞こえていないよう、少女はかわいらしく寝ていた。

「はあ…おーい、起きろーー！」

しかしこれ以上待つのは、さすがに耐えきれない真は、仕方ないの
で少女の体をゆすり動かしながら起こすこととした。だが…

「…ダメだこりゃ」

しかし、まつたくうんともすんとも言わない、まるで死んでいるか
のようこ、少女は眠っていた。

「…ねこだまし…！」

「ぱん…！」

「…」

これでも起きなかつた。

「おきるーーー朝だぞーーー！」

大声で、しかも耳元で、真は叫んでみた。

「…すぴー」

しかし、真のそんな苦労をあざ笑つかのようこ、変らずに寝ていた
のであつた。さながら、彼女を起にすのは、倒しても倒しても、何
度でも湧いて出でくる敵を相手にしているかのようでもあつた。

「…もしかして、わざとなのか？」

少女の反応を見ながら、普通、これ位したら直ぐ起きるはずであり、
現に真は自らの母に猫だましを受け、目を覚ました経験もあってか、
真がそう思ったのは無理なからぬことであつた。

そしてこれが、のちの悲劇へと続く、フワグとも言つぐるもので
あつた。

「…」「やつ

真は何か思いついたのか、近所の雷爺さん家にある柿の木から、柿をばれないようこどつて盗むといつ、そんな今では絶滅した悪ガキのような笑みを浮かべ、すぐさま走って森の中へ行った。

数分後、少女の元へ戻ってきた真の手の中に、なにやら猫じゅらしみたいな物が握られていた。

「…ふふ、いいか、俺は悪くない、すべてはこの俺をあざ笑うかのように全く起きない貴女が悪いのである、よつて、猫じゅらしの刑の処す。」

真は小学生のころ、罰ゲームに猫じゅらしを鼻の中に突っ込み、くしゃみが出るまでぐすぐつっていたのを思い出し、子供心？的な感じにそれをすぐさま実行しようと思ひ、わざわざ森の中に生えていた猫じゅらしを持って來たのであった。

しかし、真はあることに気付かなかつた、それはその植物が、見た目は確かに猫じゅらしみたいだが、中身は異世界独特のものだといつてゐる。

「…」「ちゅ」「ちゅ」「ちゅ」「ちゅ」

そんなことなどつゆ知らずの真は、絶賛、心は少年時代に戻つてしまい、態々そんな擬音語を言いながら、如何にも悪ガキが浮かびそうな笑みで、一心不乱にかわいらしく寝ている少女の鼻の所を、撲つてみた。

「・・・・・・はあ…はあ…

数分間そうしていると、突然、少女の息遣いに変化が訪れた。

(よつしゃ、これは、くしゃみの前兆だな、ふふふ)

勿論そんな少女の反応を見て、真は勝ち誇ったような感じに、心の中にガツッポーズ浮かべていたのであった。

しかし、そんな余裕の笑みは、どんどん消えていくことになる。

「はあはあはあはあ」

「…」

「はあは～まあー」

「…………」

あれ？くしゃみしないナ…てかこの息遣い、どちらかと言つと興奮しているよつな…

真は明らかにおかしい息遣いに、よつやくそれをことごとく嗅ぎついた。

「はあはあはあ、うんはあ

やはり少女は興奮（性的な意味で）しているのだらつか、体全体が何だか火照ったように赤くなり、なお且つその声もまるで、下り坂を転がるボールのように、急転直下で、とてもなく色っぽくなつていつたのであった。

「はあはあはあはあうん…あん…」

(やっぱいやっぱいやっぱいやっぱいやっぱいこれはやっぱー！…なんだか胸の中央あたりがとんがつてきてるし、これ絶対に、アレだつて、なんてエロゲ？的な、アツチの方向へ超音速の速さで突っ走つてからー…つてちくしょー！こんな姿を見ても別にそこまでアレなことを何も感じないとか悲しいんだけど…！…)

真はそんな少女の様子を見て、そして、それを見てもアレなことを

何も感じない自分を恨みながら

とりあえず、真は持っていた猫じゅらしを捨て、もひへ、何をすればいいのか分からないので、とりあえず、少女の体をゆすり動かした。

「ちょっと大丈夫か、大丈夫か、おい、とりあえず大丈夫か？」
どうやら、補正である高い精神力は、この時ばかりは発動しないのか、焦つた声で真がそう言つた。

「うんはあーもひ、寝てなんかられにやい……」

がば！…と、まるで寝ぼけながら時計を見ると、やべ！！もう9時！！完全に遅刻じゃん、そんな感じに慌てて起きる学生みたいに、少女はその叫び声とともに、飛び起きた。

「…はあ…はあ…はあ」

「…」

起きた後も、何だか未だに眠たそうな感じで、いまだにちょっとばかり漏れる色っぽい声をあげながら、呆然と立ちくしている真を少女は見つめた。

「…あんたなのね…」

「へ？」

少女が突然上げたその咳きに、真は反応しきれず、そんな間抜けな声を発した。

「！」の変態！…！」

「ぱん！…！」

そんなすつきりした音が、平手打ちされた真のほより、発せられたのであった。

「…すいませんでした」

ビンタがクリーンヒットし、真っ赤に腫れてしまつたほを、真は右手で抑えながら、まるで親の仇を見るかのような眼で見つめてくる、少女に対し、真は謝罪した。

「…まさか、媚薬草をそんな使い方をするだなんて…あなたの頭可笑しいわね」

容姿に似合わず、少女はそんな強気な言葉を真に向かつて言い放つた。

「…いやだからさ、俺、まさかその草が媚薬草だなんて分からなくてさ、不可抗力と言つか、俺さ、その植物は猫じゅらしかと思って、その…すいませんでした！！」

少女の鋭い視線を感じた真は、もはや土下座しかない、やつ思つた真は、へなへなと土下座をしたのであった。

「…まあいいわ、貴方からは下心を感じないし、それに、この毛布見たいな物、私にかぶしてくれたのは貴方なんでしょ？それに必死に私を看病してくれたのは、体の回復具合から直ぐに分かるし、貴方が看病してくれなかつたら私は死んでいたのも事実だし、私も寝起きが凄まじく悪いのは自覚している、だから今回だけは許してあげるわ…感謝しなさいよ」

少女は、ため息をつきながら、そして土下座しながら謝る真を見たあと、そう言った。

「…あつありがと」

その言葉を聞いた真は、一旦そう言ったあと、土下座の体制から解放され、キッチンと座つた体制で、少女と向かい合つた。

「…まあー、もつこの話は忘れよう、思い出すのも恥ずかしいしそれと…余つてる服とかない？」

「…？」

真は、一瞬何でいきなり服を要求するんだろうと思つたが、少女の服装を見て、有ることを察した。

「ああ、服が破れたからか」

なるほど、服もボロボロだし、そのまんまじゃ恥ずかしいのだとうことを察し、真はそう言つた。

「…俺のジャンバー、着るか？」

残念ながら、他に着るものなどないので、真は自分の着ていたジャンバーを差し出すことにした。

「…ありがと」

そう言って、なぜか少女はちょっとばかり恥ずかしがりながら、真のジャンバーを受け取り、敗れたワンピースの上にかぶせるように

着始めた。

「…おつ俺の名前は山崎真、苗字が山崎で、名が真だ、君の名前は？」

その様子を見ながら、真はとうあえず、自己紹介だつと思い、そういった。

「…ねえねえ、この私の傷口に張つてある物体は何なの？」見事にスルーされた。

「…ああ、それは絆創膏という医療具だよ、俺の国にある足からの出血や傷口が外のほかの物と触れるのを防止するための道具さ、傷が治るまではつ付けといったほうがいいよ、大丈夫、害はない」真はスルーされたことに落胆しながらも、もしかしたら、あまり言いたくないのでは？と思いつゝと間をおいた後、したかない、また後で聞くことにして、ふと浮かんだ絆創膏の説明を、この少女にしてあげた。

「…へー、バンソウ」「うね」

少女は物珍しそうに、絆創膏を恐る恐る触つてみた。

「…見たことのない素材でできてる…それに、こんな医療具見たことがない、面白いわねこれ、ねえねえ、貴方どこの国から来たの？」

「…」

真は一瞬その回答に迷つたが、異世界と言つてもいらぬ混乱を招くだけだと思い、こうこうことこした。

「…ここから東にものすぐ遠く離れた、日本と言つ国から來た」わざわざ出身地を偽るため、仮想の国を作るよりか、この世界には存在しないが、本当に自らの出身地である國名を、真は言つこととした。

「……」ホン…聞いた」ともないわね…よつぽど遠くあるのかしら

…」

彼女はそんなことを考えながらそつちでいた。

「…まあいつか、それより、ねえねえ」

「…はい？」

「お腹が空いたから…その…食べ物くれない?」

ぐ~と少女のお腹が鳴り響いた。

「…何この食べ物?ラーベッチ…ではないね…良い匂いだけど、なんて言つ食べ物なの?これ?」

カツプラーーメンの中身を無気味げに、少女は見つめた。

「…それは、カツプラーーメンと言つ、俺の国の食べ物だ、口に合つかどうかは分からぬけど、今のところ食料はそれしかないし、我慢してね」

ガーベッチといつ、謎の食べ物はおそらくラーメンに近い物だらうと思ひながら、真は段ボールの中にあるはずの箸を探していた。

「あつたあた、これを使って」

そう言つて、真は箸を渡した。

「…これは、東の国が使つているとか言つ2本棒…」めんない…わたし、一本の棒は使えないのよ」

渡された箸を見ながら、少女はそつちでいた。

「そつか…それなら別に良いよ」

まあ、偶然転移した場所が、箸が使える地域だとは限らないし、そういう思い、真はまた段ボールをあさり、中にあつたキャンプの時よく

使うプラスチックでできたフォークを手渡した。

「じゃあ、フォークは？」

「これならどうだ、そう思いながら真は言つた。

「ありがと、これなら使えるわ… とにかく、このかつぶらーめんだけ？とりあえず麺から先に食べればいいの？」

少女はフォークで麺を突きながら、そう言つた。

「…まあ、ふつうはそいやつて食べるかな、まあとりあえず、麺から食べてみてよ」

「…」

少女は麺を箸でくるくる巻いた後、よくテレビとかで、ラーメンを食べたことのない外国人が、麺を日本人見たいに吸うことができず、巻いた麺をそのまま口に運んで噉み切つたように、少女もそのようにして食べたのであつた。

「…つ…おいしい」

少女はそう言つた後、すぐさま、また麺をくるくる巻きつけないと、何故か震えた手つきで食べ始めた。

「…おいしい、何これ美味しすぎる、魔法を使った形跡もないのに、こんなに美味しいだなんて…」

そんなことをいいながら、よほど腹が減つてゐるのか、それともあまりにもの美味しさのせいか、少女はがむしゃらに、カップラーメンを食べていた。

「…」

とりあえずどうじょうか、真はがむしゃらにカップラーメンを食べている少女を見ながら、そう思つた。

(…とりあえず、今まで少女のペースで流されてしまつた感のある自己紹介をすべきだろ)

如何思つた真は、とりあえず少女が食べ終わるのを待ち、その後自

「己紹介しようと思ったのであった。

「ああ、美味しかった、貴方の国でどうかしてるわ、魔法なしでこんな美味しいものを食べられるだなんて、ねえねえ、おかわりある？」

いつの間にか、食いしん坊キャラとなってしまっている少女を見ながら、真はとりあえず、先ほど考えた自己紹介をすることにした。

「… なあ、とりあえず自己紹介ぐらいはしようぜ、未だに俺さつき紹介したまんま君の名前も分からぬしや、とりあえず、俺の名前は山崎真、苗字が山崎で、名が真だ」

真は一応、もう一度自分の名前を言いながら、少女に自らの名を言うように田線で促した。

「… 自己紹介ね…」

少女はなんだか暗い顔をし始めた。

「… なんだ？ 言えない名前なのか？」

逃げ出した、王女様ならそんなこともあり得ると、真はいつの間にかそれが前提と言つ中一的な思考になりながら、そんなことを言ったのであった。

「… いや、そういうわけじゃないのよ…」

「… じゃあ、なんなんだよ」

違うのか、じゃあ他の、奴隸商人から逃げ出したとかそういうのか、と真はそんなありがちな展開をまたもや思っていた。

「… その…」

その言葉の後、少女は予想外の爆弾発言をした。

「自分が誰だか…分からぬのよ…名前も、今までのこととも
空になつたカツ プラーメンの用器をフォークで突つつきながら、名
のない少女は、そう呟いた。

記憶と心を取り戻す覚悟

「…なるほどね…自分が誰で、そして自分が今まで何をしていたのかも覚えていない、詰まり、記憶喪失って奴か…」

先ほどの少女の発言に、真はかなり驚き、その後少女の詳しい説明を聞いたあと、そう言った

「…うん…だけど、自分のこと以外は思い出せるの、いわゆる一般常識とかは覚えてるんだけどね、言葉だってキチンとしゃべれるし、世界の国々や、食べ物の名前なんかも、キチンと分かるし、自分がことが分からぬ以外は、日常生活に支障は出ないしね」

名を失ってしまった少女は、悲しそうな目で地面を見つめながら、そう言った。

「…そつか…」

まさか記憶喪失とは思つていなかつた真は、そんな悲しそな顔をして、いる彼女の顔を見ていた。

「…」

「パチッパチッ」

真たちは何だか気まずくなり、焚き火の音だけが鳴る、沈黙が訪れた。

(記憶喪失か…この人の顔を見てみると、ホント、ドラマで見るとでは全く違うといつことがわかるよな…)

真は、記憶喪失と言われても、そんなもの、物語の中でしか見たことがなかった、だから、お世辞にもそのようなものが身近にあるとは言い難いものであった。

だが、いまは違う、現実的に、自らのすぐそばにいる少女が記憶喪失なのである。

「…」

真は自分がもし彼女と同じような記憶喪失になつたような気持ちを思い浮かべてみた。

自分の名前が分からぬ…その間隔はなんだかまるで、世界が現実の世界でなくなるような感触、そして暗転とした心、強い不安、まるで車酔いを起こしてしまつた自分が、無理やりコインロッカーの中へ詰め込まれ、ぐるんぐるんと高速回転されてしまつよつ、そんな考えたくもない感触…

「…」

真は少女を見つめた、今の精神力を持っている真でも、つい鳥肌が立つてしまうような、そんな恐ろしい感覚を、この少女が実体験しているのかと思った。

だが…

それ以降はなぜか何も感じなかつた、それしか、真は感じなかつた。この子が可哀そうだとか、哀れだとか、慰めてあげようとか、そう言つた本来は起きるはずであつた感情が起きないのであつた、精神が弄られたせいなのだろう。

「…ちつ」

そのような当たり前に起つるはずの感情が湧かない…そんな自分に腹が立つし、まるで心が自分の物じゃないみたいで、気分が悪くな

つやうでもあった。

「…あ」

そのとや、真の頭の中にある言葉が浮かんだ、何の感情も抱かない自分の心に喧嘩を売つてやるのとも思ったかもしないそんな言葉を、そして自分をこんな心にしてしまった奴に、仕返してやるつと…その自らの憎つたらしい心を、逆に利用してしまうこと…普段の自分なら恐らく浮かんでも実行できないような言葉を…元の世界では、浮かんでも絶対に恥ずかしくて言えそうにない言葉を言つことができた。

「じゃあ…俺と一緒に、お前の記憶を探しに行く、旅でもしようぜ」

そんな現代日本において、クラスメイトに告白するくらい勇気のこる言葉を、真は、憎らじい自らの心を利用することによって、躊躇うこともなく、言つことができたのであった。

そしてその言葉は、何も感じない自分の心への、真自身の意識による抵抗だったのかもしれない。

「……私の記憶を探す旅？」

少女は驚いたような顔で、そんなことを言つて真の顔見つめた。

「わう、おまえさあ、どうせこのままじゃ一人だろう、ただでさえ記憶喪失で大変なのによ、一人だつたら絶対に大変だ、それに、俺もちょっとばかり旅の仲間も募集していたところなんだ…ここで会つたのも何かの縁だし、俺も別に目的と言つても、故郷に帰るぐらいしかないし、ちょっとぐらり寄り道しても変らん、せうにだ、俺はここいら辺にある国」ととか、仕組みやら文化のこととか、まったく言つていいほどよく知らないんだよ、だからな、お前なら、こじり込に國の」ととか詳しいだろう、だからさ

真は言った、

「その見返りとして、記憶喪失のことでお前の心が苦しくなつたら、
その心を支える柱として、俺が支えてやる、記憶を探しきるまで…」

だから、俺と一緒に旅に行こうぜ」

笑顔で、おそらく、ラノベ的展開になりたいとか、そんなものではなく、本心で、この子と一緒に旅がしたいと…

「…」

「…」

「…ふふふ」

「…へ？」

少女は突然、その鈴のよつた声で、笑い始めた。

「フフフあはははは、貴方つて面白いね、会つて一日もたつてない
人にそんなことを言うだなんて」

「…」

真は沈黙していた。

「でもね」

少女はそんな様子の真を見ながら、笑顔で言った。

「私、実は怖かつたの、今まで真になんだか強気な姿勢で言つて
いたけれど、やっぱりさ、自分が誰なのかも分からなつてものす
ごく怖くつて、自分が今まで何をしていたのかも分からぬのだな
んて…それってやっぱり怖いよね、だつて、もしかしたら私、記憶
失う前の私は、大量殺人犯なのかもしれない、そう思うと、耐えら
れないぐらい怖くつて」

少女は下を向きなら、そして、おそらくその言葉を感情的に強く言

つてしまつた影響だらうか、いつの間にか少女は涙を流していた。

「…だからね…大きさかもしれないけど、嬉しかったの、貴方のそ
のつい笑っちゃいそうな言葉が…貴方が私のその可笑しなりそ
心を支えてくれるというその言葉が…」

真は、彼女のその言葉を聞きながら、なんだか自分の心が溶けてい
くような感じで…だんだんと…真の心がちょっとだけ、自分の物に
戻つてくるような感触がした。

「いいわよ、真、あなたと一緒に旅に出ても」

真は、その言葉を聞いたあと、良かつたと思ったが。

「…だけどね…ちょっとだけ条件があるの
少女はかわいげな笑顔で、そう言つた。

「貴方に、私の名前を決めてほしいの、この可笑しくて、倒れてしま
いそうな心を、支えてくれるあなたが…私の心を支える為の、柱
を作つてほしいの」

「…」

真は、未だに目を涙で濡らしている少女の顔見ながら、自然と、まるでそれが常識かの様に、彼女の名前を考えた。

「…」

真が見つめる少女のその顔には、未だに渴いていない涙を含んだ、美しい澄んだ空のような瞳と、そして、そこに垂れかかる淡い、まるで宇宙から見た地球のように青い髪…

「…」

真はふと空を見上げた、排気ガスとか、そんな空を汚すものがない世界にある、澄んだ青空、その空はまるで、目の前にいる名を失ってしまった少女その物のような感じがした。

「…ソラ」

真が言った

「青空のように美しい瞳と髪を持つていてる君にちなんだ ソラ、といつも前はどうだ？」

真は少女に向かって問いかけた。

「…ソラ」

少女は答えた

「私の名前はソラ、真と一緒に旅する者、よろしくね」
少女の顔には、もう涙はなく、名前と言つ支えを持った、美しく可愛らしい、青空のような笑みが浮かんでいた。

その少女の笑顔を見ながら、真はこれから旅について思いをはせていた、少女の記憶を取り戻す旅…そして、自らの心を取り戻すための、旅に…

記憶と心を取り戻す覚悟（後書き）

批判、称賛問わず、感想＆評価を頂けると、作者はパワーアップします。

たぶん

「…なあ、その、シユーストラスとか言つ町まで、後どのくらいあるんだ？もう疲れた」

あのあと真はソラの案内で、まずシユーストラスとか言つ街を田指すため、とぼとぼと歩きながら、ようやく人が作ったとおもわしき道を見つけ、そして、その道を歩いて、一時間がたつた頃であつた、もともと帰宅部な真は、体力的に耐えきれず、更に、携行用ガスコンロやカツプラー・メンが入った重たいリュックを背負つているため、更に疲れ、地べたにへなへと座りながら言った。

「うん…一週間くらいはかかるわね」

ソラがそんな疲れ果てた真の様子を見ながら、絶望的な言葉を漏らした。ちなみに今のソラは真が召喚した服を着ている、ソラの名に恥じない空色のブレザーにチェックのスカート、我ながら素晴らしい物を召喚したと、ソラの格好を見ながら、真は思つていた。

「いつ一週間だと…」

真はそんな現代では考えられないほどの長時間の移動に、呆然とした。

そして、そんな真の様子に耐えかねたのか、ソラは言った。

「…ねえ真？別にこれぐらい普通だよ、それにこれぐらい歩いただけで疲れるなんて、もしかして、貴方頼りない？」
ひゅ――――――――――――――――――――――――――

風が真たちを駆け巡った。

「……いや……チョットな……異世界に転移した疲れが、ここに溜まってきたトオモウ」

真は、冷や汗をかきながら、そんな苦しまれの言訳を言つていた。

あのあと、真は自らが異世界と言ひこの世界とは全く別の世界からやつてきたといふことを明かし、ここに至る経緯まで伝えた、初めは信じくれないかもしれないと思つた真であつたが、案の定ソラは呆氣ないほど簡単に納得してくれた、どうやらカッパワーメンがあまりにも異常だったかららしい。

「……ふふーん、騙されないわよ、そんな」とぐらりと演技だつてことぐらりと直ぐに分かつちやうふんだから、「どうやらばれだつたらしい

「……何故ばれた」

「私はね、こう見ても勘が鋭いのよ、何故だか全然分かんないけどね、……まあいいわ、休憩しましょ」

そう言つて、ソラは真の横に座つた。

ひゅーー

そんな涼しげな風が、座つている一人を包み込むように、吹いたのであつた。

「……」

真は、さつきのソラの言葉から、自分はこの世界で生きていけるのか？もしかしたら明日には死んでいるのかもしれない、とそんなことを心配げに思つていたのであつた。

「……なあ、ソラって強いのか？その、戦闘とかぞ」

自分よりかなり勇ましそうな彼女に、真はそんな情けないことを言つていた。

「……うん……よく分かんない、記憶ないから、今私が使える魔法から考えるに、残念だけど、私は弱いね」

ソラはなんだかふてくされた様な顔でそう言った

「…具体的にどんな魔法が使えるんだ？」

そう、この言葉から分かる通りに、この世界にはあのウインドウズが書かれてあつた通りに魔法があるのである。ちなみに真が自分は使えるかとソラに聞いてみたら、魔力ある?と聞いてきたので、ないと答えたら、そんな使えるわけないじゃん、とけらけら笑われたのは真のちょっとしたトラウマである。

「うん…攻撃的な系統の火系統はファイアボールと超初級の手から火を出すことだけ、水系統は、ちょっとしたヒーリング位しか使えないし、一番得意の風系統は人の気配を探知する、探索マジックと、人を吹き飛ばす突風を吹かせるぐらい、土系統は、鍊金だけかな… 合わせ技として、風と土で、砂ぼこりのちょっととした竜巻ぐらいかしきれ、ちなみに光とか闇とかは全く使えません、ランクで言えば、Fね」

67

ちなみに、魔法には次の系統があるらしい、火、水、風、土、光、闇、とあり、個人差があるらしく、大抵はどれか一つがとても上手くて、他の系統は微妙、もしくは苦手が多く、また、まったく才能がなく、魔法を使えない人もいれば、全部を極めた人もいるらしい、火、水、風、土、は魔法に才能がある人ならだれでも使えるらしい、逆に、光、闇、は、使える人は少ない。あと、魔法が使える者にはランクづけがあり、最低ランクのGからSSSSまであるらしい。もちろん真はG以下である。

「…

真はファンタジーについても結構詳しいので、これらの魔法の意味は大体は分かつた、だけど…もつちょっと強くてもいいのでは…とソラではなく空を見ながら思っていた…

「…なあ、魔法ってどうやつたらうまく使えるようになるんだ?」

いくら精神を弄られたと言つても、死にたくないという気持ちはあるので、これぐらいの魔法では心配になつてしまつた真はそう言った。

「……うん……魔法って言つのはね、想像力で決まるのよ、例えば竜巻をうまく作りたいときには、風魔法の呪文を言つた後、風魔法の魔法陣を出し、竜巻が回るのを思い浮かべながら、体内にある魔力を外に出し、その魔力で竜巻が回る仕組みを思い浮かべながら、魔力を思い浮かべたとおりに回らせるための呪文を言つた後、発生するのよ、まあ、一番手つ取り早いのは、魔法具とかを使えばいいんだけど、魔法具なんてないし、高いし使い捨てが多いから、やめた方がいいよ」

ソラは、魔法のことがわからい真のために、分かりやすくそつとつた。

「……うん……つまり……魔法は魔法具を使えば簡単に強くなれるが、効率が悪くて使わない方がいい……これは分かる、他に通常での魔法の強化は想像力が大切で、たとえば竜巻を起こすためには、竜巻の仕組みを思い浮かべながら呪文を唱えると発生すると言つ感じか」

(…までよ)

真は急に血りの頭の中にひらめいたものがあり、ついさう言つた。

「……なあソラ、お前竜巻ってどんな自然現象なのか、分かるのか？」
「え……どんな自然現象かつて？……うん……風が、くるくる回るような、そんな感じ？」

「……」

なるほど、と真はそう思つた、この世界の人たちは上昇気流とか、下降気流なんていう、詳しい自然現象とかを知らないんだと、そし

てそれは、自らの異世界の、進んだ科学技術により解明された竜巻に関する詳しい知識によつて、影響を与えることができると言つことを…

「… なあ、竜巻は元となる雲があつて、その雲が上昇気流を起こして雲の下の空気を吸い上げ、天候が乱れると空気の流れが重なつて渦巻きを作る、この渦巻きが集まつてくると、回る速さは一層早くなり、下にあるものを吸い上げる、これが竜巻の仕組み… こんな話を聞いたことがあるか？」

真は、どこかの小説にそんなことが書いてあったのを思い出し、竜巻のちよつとした知識を披露した。

「…え、なにそれ？… ちよつと詳しく教えて…！」

ソラはどうやら、その説明に興味が湧いたらしく、慌てながらそう言った。

そして、結局竜巻に関する本を読み廻すのはめになつたのは、当然のことであつた。

「… へー、このリカノキヨウカシヨと言つのは、凄いものね、魔法も使わずにこいつのような綺麗な絵を長期間、これまた高品質な紙に写してあるだなんて… 字が分からぬのが悔しいな…」

真が昔使つていた小学校の理科の教科書を見ながら、ソラは言った。

ちなみに、言葉や言語の問題についてはすでに答えたが出ており、会話はちゃんとできているは今までの分かるが、文字を読むことに関しては少し違つらしく、真はこの世界の文字を何故か読むこと

ができるが、この世界の人、ソラみたいな人は、真の世界の文字を読むことができないであつた。何か中途半端だな、どうせならこつちの世界の人間も俺の世界の文字が読めるようにすればいいのに、真はそんなどうにもなりそうにない愚痴を言つていたのであつた。

「…いちいち、真に翻訳してもらつても不便だし、こうなつたら…ソラは何を思つたのか、突如こいつ宣言した。

「真！」

「なんだ？」

「私に、二ホンゴ教えて」

「…なんで」

「真の世界の書物は、私たちの世界に比べたらとてつもなく進んでいるのよ、絵を見るだけでわかる、それに私、真の世界に興味が出てきたし、これからも真の世界の文字を読むことだってあるかもしけないじやない、だから、お願ひ、教えて」

ソラは、手を組みながら、真にねだるよつに言つた。

「…いいけど、だけど日本語って確かに俺の世界でも最も難しい言語の一つだぜ、そんな簡単にできるのか？」

真は、この世界の文字をなぜか理解することができるため、日本語を教えてあげることも出来なくもないが、一応、世界の中でもトツブクラスに難しいと言われている日本語をちゃんとソラが覚えてくれるかどうか、不安だつたため、そう言つた。

「大丈夫、私、頑張るから」

ソラは決意のこもつた顔で、そう言つた。

「…日本語には確か、漢字と平仮名と片仮名とアラビア数字とアル

ファベットと、かなり大量の文字が使われてるけど、大丈夫か」
まだ心配な真は最後の抵抗をした。

「：大丈夫大丈夫だつて、ほら、まずは先生、言葉の基礎から
笑顔でそういうソラ、結局俺たちはこれから日本語をソラに対して
教えることとなつた。

ちなみに今日だけで平仮名の発音と書くことができてしまったこ
とには、真は眼をくりぬくほど驚き。

そして、彼女のステータスに天才と書かれていたことを思い出し、
妙に納得した真であつた。

スクーターとグラム缶風田（前書き）

至極簡単な自己紹介

ソラ

一応この物語のヒロインである。

森の中で傷を負い、拳句の果てに記憶を失つた、如何にもな可哀そ
うなヒロインである、性格としては、少々いたずら心があり過ぎる
所が難点らしい。

得意な魔法は名前的に如何にもな風系統である。

好きなものは、今のところカツラーメン、現代日本の科学的知識
らしい。

スクーターヒドゥム缶風団

「…」

「どうしたの真? そんな今にも疲労でぶつ倒れそうな顔? 足が震えてるわよ」

「…何でもない、精神的には疲れてないしな」

あ…足が…足が筋肉痛で動けね、大体、三日間連続で長距離を歩くだなんてきつ過ぎる!…真は旅立ちの日から、三日が立った昼前、筋肉痛で痛んだり、震えたりする足を引きずりながら、心の底からそう思つたのであつた。

この三日間、幸いにもやれモンスターに襲われたとか、やれ盜賊に襲われたとか、そんなこともなかつたことだけが、真にとつて幸いだつたであろう、しかしそれでも、運動不足で帰宅部の真にとつて、肉体的に、体力的に、段々と、それこそドリルで削られていくがごとし減つて行つたのであつた。皮肉なことに、弄られたおかげで、精神的には大丈夫だけど。

「…」うなつたら

真はついにある考え方を実行することにしたのであつた。

「…ん? どうしたの真」

ソラがその言葉に反応した。

「…移動手段として、なんか召喚しよう」

真はついに重要?なことを決断した。

真は今まで、何度もなく、現代にある乗り物を召喚しようと思つ

た時があつた、ただでさえ重たい荷物を思つてゐる真にとつて、そう思ふのは当然のことであつたが…まあ、それは、緊急事態に備えるための、召喚数を出来るだけ減らしてはいけないというソラと決めた方針で、そして、横ですがすがしい顔で歩いてゐるソラに負けたくない気持ちもあつてか、結局今まで召喚することがなかつたのであつた。まあ、精神的には疲れていなかつたこそだつたのかもしれないが。

「ソラ、車召喚しても大丈夫かな？」

真は一応、現代的な交通手段で、操縦したことがあるのは、自転車、そして、スクーター位な物であつた、ちなみに、スクーターは鈴木という真の友達その？から借りたもので、勿論無免許運転である、まあ、青春した勢いでやつてしまつたのである。

「…クルマ？ああ、確か馬なし鉄馬車のことね」

ファンタジーの人人が言いそうな名称である。

「だけど、確かクルマだっけ？真そのことを話した時に、自分では運転できないとか、言つていたような気がするんだけど…」

「…いや、一応力タログとか…そう言つ、車の運転の仕方が乗つている雑誌なんかを召喚すればいいかなつと…」

真は、そんな車をなめてるとしか言いようのないことを言つていた。元の世界なら補導されても可笑しくない奴である。

「…うん…やめといた方がいいよ、多分真がクルマを運転するのって、どうせ、初心者が馬車を運転するのに等しい行為なんでしょう、やめた方が良いわ、それに、この先狭い道なんかもあるから、図体のでかいクルマなんかは通るのは難しいし、それに、人のいる場所に行つたらどうしようもなく目立つから、大変になるし、馬車よりも大きい鉄の箱が、更に馬車よりも数倍のスピードで走つてたら、何も知らない人にとってみれば、恐怖そのものよ、最悪、討伐対象にされるかも」

結局、クルマはやめた方がいいという結論に達した。

「じゃあ、バイクはどうだ？」

「山崎真が告げる、スクーターを召喚せよ」

「うん…これも目立つわね、いい、私たちは、あまり戦闘能力が高

くないの、こんな目立つもの持つてたら、盗賊に物珍しがられ、襲

われる確率が高くなるかも、もつと地味なもの…」

「…じゃあ、スクーターなんかどうだ？」

「うん…これも結構目立つけど、これならギリギリ許容範囲かも、

後はこのバイクに、地味な色を塗つとけば、更に許容範囲が増すかも」

どうやら、山崎へソラの許容範囲とやらに引っ掛けたみたいである。

「…よし、これでいいな」

「山崎へソラに再度確認した。

「うん良いよ、それに、これ以下だと、ゲンツキ?だつたけ、あれ

じやあ私もちょっと頼りないかも、スクーターが最良かもね

世界の原付ファンに喧嘩を売ったソラであった。

「よし、じゃあ召喚するか

ちなみに、現在の真の召喚数は5、である。

真が今まで過ごした中で、気づいたことが一つだけあった、それは、

一日で三つのある召喚数を使いきれなかつた場合、その召喚数は、

明日へと引き継がれるということである。

真は、このことに気づいた時、よかつたと、ため息をついたものである。

ちなみに、召喚する方法についても、理解しつつあった。

召喚するには、やっぱり想像力は欠かせなく、自らが実際に触つたり、見たことがあるものなら、固有名詞を言わなくとも、あの時のキャンプの時に持っていた引っ越しのサカイ印の段ボール箱のように、召喚できたが、例えば、写真のみでしか見たことがなかつた物の場合、やはり、ちゃんとした固有名詞を言わなければダメみたいであつた。

そして、今回召喚するスクーターは真自身が鈴木より借りたスクーターそのものを召喚するため、詳しい固有名詞とかは言わなかつたのであつた。

ばー！と乾いた音と共に、銀色のスクーターが忽然と現れたのであつた。

ちなみに、一人の乗りのスクーターである。

「…いつも思うけど、真つて」

凄いよね、と言つのかと、真は思つたのだが

「この能力が無かつたら脳なしよね」

ごもつともな発言がなされたのであつた。

「…ひつで…」

こんなにひどいことを言われたのに、傷付かない心、とりあえず悲しいなど、思つた真であった。

「フフフ、冗談よ冗談、さ、乗りますよう、真」

「…驚かせるなよ、まったく」

どうもソラはからかい癖が有るようだと真は思いながら、燃料がち

ちゃんと満タンなのかどうかを確認し、召喚した際にどうか可笑しくなった所がないかどうかを確認した後、自らが今まで背負っていた荷物をバランスをちゃんと取れるよう両方にくくりつけた後、真はソラに言った。

「よし、乗れソラ」

「うん」

真の呼びかけにこたえてソラがそつそつと、真の後ろに、ソラが座つた。

「よし、じゃあ行くか」

真は、一応、鈴木と一緒にこのバイクで一人乗りをした経験があるため、一応二人乗りはしたことがあるが、それは遊びでのことであつて、実は公道とかを真はスクーターを使って走つたことがなかつたのであつた、そこまでスクーターの運転に慣れていなかつたこともある、まあ、鈴木によるスクーター操縦法の真への伝授によつて、何とか運転できるのが、現在の真の現状である。

(ちゃんと運転できるかな俺……)

そのためか、真はちゃんと走れるかどうか不安に襲われながらも、真は、スクーターのエンジンをかけた。

「ブロロロロロロロ」

「おお、すごい！本当に生き物見たいに動くんだ、不思議」
後ろに乗っているソラが動き出したスクーターを見ながら、鈴のよくな美しい笑い声でそう言つた。

「…」

その光景を見ながら、真はあることを思い出していた。

それは、鈴木が確かこのスクーターを、一生懸命バイトしてまで買ったのは、彼女を後ろに乗せて走つてみたいと言つ、願望から来たからである、まあ、結局の真が借りるまでにその彼女とやらを乗せたことはなかつたみたいだが…まあ、乗せる彼女が居なかつたのだら、と真は思つていたのであつた。

「…

そして、真はそのことを思い出しながら、いつ思つた。

(すまぬ鈴木)　と…

「へいへい、行きますぜ」

「わーすごーー！本当に魔法なしで走るなんて、面白いー！」

田をきりかひり輝かせながら、ソラが真に言つた。

「ブロロロロロロロロ」

おそらく、現代人に例えるなら、S.F.O.に特別に乗れた時とみた
いなんだな…と、真は喜ぶソラを見ながらそう思つた。

「ブロロロロロロロロ」
それから、数分後、スクーターは時速50キロの速さで走行して
いた。

「ヒヤハ

…真…このすぐーたーて乗り物、想像以上に

早いじゃない…ってあれ真大丈夫

「…ちよ…危ないからマジで、運転に集中しとるから、話しかけないでよ…」

彼は現在、召喚したてほやほやのスクーターにて、異世界の大地を走行していたのであつた。

異世界の大地を美少女と一緒にスクーターでさうそくと駆け抜ける、世の男子にとつて夢のような話だが、真のこの言葉から察するに、あまり余裕はなさそうである。

なぜか…理由は簡単である、真は後ろに大量の荷物をのつけながらオートバイを運転したことなどないのであつたから、やはり想像通りと言うか、無免許運転の天罰と言いつか、やはり、不安定な走行だったのであつた、例えて言うならば、二人乗りの自転車で坂道を上がるような感じだらう、普通ならどうしても不安定になってしまい、まともな運転などできない、今まで運転できたのも、はつきり言つて、精神を弄られてたからである。普通なら怖くて怖くて運転できない。

「もひ、そんな卑屈になつてないで、ほら、真が自慢してた、りょうてばなし運転とか言うのしてみなさいよ

ソラがさりげなく恐ろしいことを言つ

「ツ…いやソラ、それは自転車のこと…」

「えい…」

気づいたら、ソラの白い手によつて真は強制的に両手手放し運転をしていた。

「…ツ…！」

真は、「プリンの時すら感じえなかつた恐怖を感じながらも、自らの体を駆使し、バランスを保つていた、おそらく生存本能とも言えるのだろう。

「…ねえ、真、両手放し運転で、結局どうやら辺がす」このへん

おそらく、自転車の手放し運転すら知らないソラにひとひじくへた
りまえな言葉だったであろ？。

「…いいかソラ」

そんなソラに、真は心臓をこれでもかと言ひませど心臓をぱくぱくせせ
ながら、ソラに言った。

「いますぐ、俺の手を離して」

無理やり離すとバランスを崩すので、真は小さな声で叫んだ。

「…なんで？」

「いいから早く話してください、お願ひします」

「…」

ちょっとばかりの沈黙が訪れた

「…ふふん、やなこつた」

おそらく現状の恐ろしさを理解できていないのだろう、それだから
こそ生まれる、ちょっとばかりふざけ心から、生まれた笑顔でそう
言った。

「…」

その美しい笑顔が、悪魔の微笑みに見えた真であつた。

「うーんうーんうーん」

そんなことをしていると、いつの間にか夕方になり、そして異世界でも定番らしい、夕方の虫の声が聞こえてきた。

「あー面白かった、速度も馬車並みに速いし、それに疲れないからずっとその速度を維持してられる、凄いわねホント、食べ物食べないから食費もからないし…あつそつ言えばがそりんと言つのを食べるんだっだけそれ」

ソラが満足げにふと真にそつ話しかけた。

「…いや…ゴブリンとの命をかけの戦いのときにも感じなかつたはずの恐怖心が、まさか、このよつた形で感じるとは…もし、精神弄られていなかつたら冷静でいられず、終わつてただろうな…」

両手放しといつ、見つかつたら即刻逮捕されそうな暴挙をした真は、しかし、精神的には疲れていため、屍にはなつてはいなかつたが、肉体的には疲れたようで、真はスクーターの前で倒れ伏せていたのであつた。

「…もう真一人の話をちゃんと聞いてーせつかくこんな面白いこと体験したんだし、もつと張り切つていこうよー」

ソラは倒れ伏せたいる真の頭をたたきながらそつ話した、その姿は、クラスの女子たちが、ちょっとした事だけでありえないほどテンションアップするように、この世界の女子もテンションアップしたら手がつけられないほどテンションアップしたのであつた。

「もう、ほら地べたになんか寝そべつてないで、ちゃんと立ちなさい！」

「分かつた！分かつたからわざわざ引つ張らないでくれ！」

しかし、真は現在体力的に疲れ、まるで、予想外なくらいテストの点数が低かつた時の」とくテンションがダウンしており、その彼らの温度差に、まるで今すぐにでも台風でも発生するではないかと思つてしまふほどだ。

「せり、セリセリ、起きて起きて、それと、一ホンゴの続きを… や
んと今日もしてもいいわよ」

ソラはチョット悪だくみを浮かべたように、ニッコリ笑いながらそ
う言つた。

「… わよシ… もう今日は疲れたんだけど… 勘弁してくれ」

真は本当にマジで疲れたので、それだけは勘弁してくれとお願ひし
た。

「だめ… 早く私も二ホンゴを理解したいんだから、ほら、机代わり
の段ボール出して」

「… ましい、と真は思った、このままでは、疲れて死んでしまうと…

しかし、これといった言い訳は… ついに浮かぶ」ともなく

「ほり、準備完了」

いつの間にか勉強の準備を完了した空が田の前にいたのであった。

「… ああ、せめて風呂に入つてすつきりしたいな…」

真はついそんなこと言つてしまつていていたのであった

(ツー? まてよ風呂?)

「やうだ!! 風呂に入らう!!」

「へ? フロ?」

真は話を強制的にずりすげぐ、そつとしたのであった。

真がこの世界に来てから今までに気づいたことが一つだけあった、
それは体が老廃物等で中々汚れないことである、この世界に来てか
ら、風呂に入るなんて余裕がなかつた真は、一番そのことを気にし

ていたのだが、そのことに気づき、ソラに質問してみたところ、「どうやらこの世界では成長期まつ盛りの奴でも、一週間に一回にでも水浴びなどをすることによって、清潔な体を保つていらっしゃるらしい、何故かはわからないが…」

とりあえずはこの世界にいる限り、元の世界のように毎日風呂に入らなくては清潔でいられないということではなく、別段問題はなかつたのでだが、やっぱり日本人として…毎日風呂に入るのが日課な真にとつて、たとえ体の汚れを落とす意味がなくとも、やはり風呂に入りたい気持でいたのである。

「…へー、このドラムカン？で言つのに水を入れて、温めた後入るんだ…面白そうね」

ちなみに、この世界にもお風呂という習慣はあるらしいが、大体が貴族とかいう特權階級？の奴らや、金持ちしか入れないらしい、まあ、体を洗うぐらいなら、魔法でもできるからそこまで流行らないだけなのかもしれない、真はドラムカン風呂の準備をしながら、そんなことを思つていた。

実は以前真は、ドラム缶風呂に入ったことがあるのであつた、中学生のころ、自らの祖父が用意してくれて、入つたのである、そのため、それをそのまま召喚すれば、余裕で風呂に入れるのであつた。

「よし、これでよし」

一様召喚したドラム缶風呂に支障はないかチェックした後、真は確かめるようにそう言つた。

「ふふ、では入るとするか」

真は今から入るドラム缶風呂をワクワクしながら入ろうとしたしかし、

「…」

「…………」

今から服を脱がなくてはならないのだが……そんな真の様子を未だに
ここにこしながら見ている空が居たのであった。

「…………」

「……いや……ソラ」

「……どうしたの？」

「……ソラが見たまんまじや恥ずかしくて入れないのだが……」

「あつこめんね、ふふふ、じゃあ」ゆつくり～」

そう言つてソラは真が見えない位置に、笑いながら去つて行つたの
であつた。

「……明らかにわざとだらアレ」

そつ恋いた真であつた。

「…………」

いつの間にか夕田はくれ、今では見慣れてしまつた五つの円を見な
がら、真はドラム缶風呂に入つていたのであつた。

「……こやー、やつぱり日本人は風呂だよ風呂、異世界に来てしまつ
ても精神が弄られてしまつても、心がいやされる、それだけは変わ
らないな、特にドラム缶風呂なんて、雰囲気的にいつもは言つてい
る風呂より倍の効果だぜ」

真は、これほどまでに風呂に入つただけで、こんな気持ちになれた
のは初めてであつた。

「……やつぱり……元の世界が恋しいな

だけど……真は思つた

「……だけど、自分としてはそつ恋つてゐるんだけど……心は、そつま思
つていらないんだよな……」

そう、真の心は今でも奪われたままのだ……自分としては元の世界が

恋しいと思いたいのに、それを否定する自らの心…狂つてしまいそうなおかしな状況下だが、皮肉なことにそれを防ぐのは、強化された精神によるものである。

「…そう言えば、中学の頃に、このドラム缶風呂に入った時は、鈴木と一緒に入ったんだけ、ドラム缶風呂の中で暴れまわったりして、ふざけ合つたりしたつけな…」

真はもしかしたらもう一度と会えないかもしれない友人のことを、このドラム缶風呂の思い出と一緒に思い出していた。

「…はあー、会いたいのに別に会わなくていいと思つてしまつ…分け分かんねー」

しかし、やっぱり自らの心は矛盾した方向に行つてしまつのであった。

「…チツ、はあー…なんか寂しいな」

真は、なんだかそんな風にばかり思つていると、何故かはわからないうが、なんだか心ではなく、自分自身の存在みたいなものが、ぽつかりと穴があいたような、そんな気分に襲われた。

しかし、そんな心を埋めるどころか、そのあいた穴を埋めた跡地にマジノ線顔負けの要塞を建てるような奴が表れたのだつた。

「真」

野生のソラが表れた！！（ポケモン風に）

「…どうしたんだ一体」

突然何故かにつこり笑いながら現れたソラを見ながら、一応大事なところを両手で隠した後、何か緊急事態でもあつたか？と思ひながら言つた。

「ふふふふ、実はね、私も一緒に入るつと思つて」
驚愕の言葉を言いながらソラは、自らのブレザーを脱ぎ始めたのであつた。

「……ツ―――ちょっとまた…行き成りビリしたんだ…え?
一体」

当然のことながら、突然そのような行動に出たソラに真は聞いた。
「だつてさ、私一人だけで過ごしていても面白くないし…、それなら、真と一緒に入つてもいいかなつて」

ふふふふと、ソラは鈴のような美しい声で笑いながら、ブラジャーが見えるか見えないかの位置にまでソラの服を脱ぐ攻撃は続けていた。

「貴方だつて、私の裸を見て、一緒に入りたいといつ気持ち…あるでしょ?」

「…ない…ないはずだ」

真は服を脱ぐ攻撃によつてレッドラインまで削られた自らのHを元に、最後の抵抗を見せた。

「…フフフ」

「チラツ」

と、まあ、何が見えてしまったのかは想像にお任せ

「お願い、一緒に入る?」

上目づかいでソラは真を見つめる攻撃をした。

「・・・・・・・・・・・・」

上目遣いでのお願い、ちらつと見えるあんなとこるやそんなどこる、こんなことを超のつく美少女がやつているのである…如何に精神をいじられようとも、真は…

「…「カリマシタ」

ついに倒れてしまい、そう言つてしまつたのであつた。そして…

「…フフフフ、アハハハハハハハハハツ」

しかし、突然、ソラは腹を抑えながら笑い転げたのであった。

「…へ？」

真は状況が分からず、そんな間抜けな声を出してしまった。

「ヒツヒヤハハハハ、もう、笑い死んじゃうよアハハハ

きょとんと、真は目が点になりながらソラの様子をただただ眺めて

いるしかなかつたのであつた。

「…どういう意味？」

ようやく出せた一言で、真はソラに言った。

「アハハハハハ、まさか、いくら男女一人つきりの旅をしてるから」と言って、そんな別に恋人とかそういうのじゃないんだから、そんな筈ないじやん、まさか、本気で信じちゃうだなんて、アハハハハハハハハハハ

ハハハハハ

「・・・・・・・・・・」

ヒュ

と、期待を裏切られたドラム缶風呂に入った真の背中を、風か追い打ちをかけるように吹いた。

「フフフ、じゃあ、もうそろそろ上がるなさいよ、のぼせちゃうし、私も早くどちらむかんブロに入つて見たいから、じゃあねソラはこり笑いながら、立ち去つて行つた。

「…それはないだろ」

真は、落胆しながらそう呟いた。

「…はあー

「 ゼバッ 」

と、真はため息をつきながら、ゼバッとお湯に奥まで浸かった。

「 …… 」

「 つーんりーんりーん 」

真はお湯につかりながら、元の世界と同じように鳥へ虫の声に耳を澄ませ、そして、五つある丸を見つめこいた。

「 でもまあ 」

真は言った

「 …… 僕は一人だけじゃない、自分と心が矛盾して、ぐちゅぐちゅになつても支えてくれる奴が、ちゃんとこないと言ひついどが再確認できただけでも、良しとするか 」

そう言って、真はドラム缶風呂から上がった。

「 …… 」

真が見えない位置に隠れながら、ソラは黙つて、真が来るのを待つていた。

「 …… 真 」

ソラは言った

「 ありがとう 」

真に聞こえないよう、静かに呑み込んだ。

お互いで自らの心を支え合つ、現代的なもので異世界を旅する旅は、まだ始まつたばかりであった。

スクーターとドラム缶風呂（後書き）

指摘がありましたので、近代兵器操作術に関する説明をします。

まず、適応範囲として、軍用トラックはどうか、これは適応されません車は、最低でも武器（固定機銃等）をつけていないと兵器としてみなされません。

次、近代兵器と言つても、近代ではないが一応1868年までに開発された兵器である刀、槍等、適応されません。

次、なら、日本軍がよく使つてた、九十五式軍刀等の、近代軍が使つていた刀ならどうか、これは、可です。

次、銃剣等はどうか、これも可です。といつても、銃剣なんかで刀とやりあえるのかどうか分かりませんが。

一応、これらのことと主人公たちは、そんなことを思いつかなかつた、と言つておいてください。

ギルバード魔器団（魔書隊）

期末テストと並んで魔物がよけやへ去つた…

「ヒジがハーストリア帝国シユートラスの町か」

「ええ、そう、ヒジがシユートラス」

ソラが真の問いに答えるようそう言った。

オートバイクで、走ることにより、ソラ曰く、あり得ないほど早く、彼らは遂に、シユートラスの町に辿り着いたのであった。

「…」

真はシユートラスの街並みを見た。

そこからじゅうにあるレンガ造りの建物、アスファルトではなく、石畳で舗装された道、露店の店、そして何よりも、人間のほかに、耳が人間よりも長いエルフ、体に鱗が生えている竜人、猫耳尻尾が生えている猫族、まあ簡単に言えば人外なやつらがあふれ返っているのである、如何にもファンタジーだなつたと、真はこれらの光景を見ながらそう思った。

「…よし、じゃあ、冒険者ギルドに登録する立つたんだけ？」

真は、事前にこのシユートラスの町に着いた後のことソラと話し合っていたんだあそう答えた。

「うん、そうね、…ええつと…あつたー、ギルドのシユートラス支店はあれね」

そう言ってソラの指さす方向を見た。

指さす方向には、これまで西洋建築で作られた大きい建物があつた、そして横には、ギルドの証らしい、剣の紋章みたいなのが書かれた旗が掲げられていた。

「よし、じゃあ行こう真」

ソラはそう言ひと、真を引き連れて、ギルドへと足を運んだ。

冒険者ギルドとは、簡単に言えばこの世界独特の就職先である。この世界には、モンスターと言つ有害な生き物がいる、それらから人間たち知的種族（エルフとか人間と一緒に暮らせる奴らをそう言うらしい）を守るために、設立された組織である、その構造は簡単で、まず、モンスターを討伐してほしいもしくは、旅の護衛をしてほしいという依頼が来る、勿論依頼を要請するときには、難易度に応じて、依頼主がお金を払ってくれるというもの、ギルドに入ればそれらの依頼が受けやすいことと、ギルドに加盟している場合、自分が保障される、言わば見ず知らずのものと言つコレッテルがなくなるとか言つ色々な利点がある。

これは異世界人の真にとつて、非常に喜ばしいものである。これらが言わばギルドである。

ちなみにギルドの創設はこの世界の伝説をまず語らなくてはならない。

昔々、人々はモンスターによつて恐怖の真つただ中にあつた、魔王と呼ばれる恐怖の大魔王が表れたことにより、モンスターの数は急増、国では到底討伐しきれず、年間、何十万人もの人間たちが命を落としていた。そこで表れたのが勇者である、勇者は、類まれな知恵と勇気で、仲間と共にモンスター急増の原因となつた魔王を倒すため、陸を空を海を水中を、地中を、掛けついに魔王を倒したのであった。

本当はこれよりもっと詳しくなるらしいけど、大体これが簡単にまとめた、この世界の伝説である勇者の伝説である、次がギルド創設に関する。

しかし、魔王を倒した後も、未だに大量にいるモンスター人々は手を焼いていた、そこでモンスターたちを効率よく討伐するために、勇者の手によつて作られたのがギルドである、と言われているまあ、ギルド成立から10000年以上もたつたんなら当たり前だよな…勇者と言ひ名前が出て来た時には驚いたけど、結局は半ば迷信みたいなものだと真はそう思いながらギルドの受付の人たちに登録の申請を申し出た。

「あの、すみません、私たちギルドに登録したいんですけど」

「あつはい、登録ですね、はい、ではまずこちらの紙に、名前と出身地を書いてください、偽名でも構いません」

「はい、ほら真、ここに名前を書く」

ソラが、真に促すように言つた。

「…分かつたよ」

偽名OKと言う、不思議な制度に疑問を浮かべながらも、そばにあつた、これまた初めて見る物ではないか?と言える本場の羽ペンで、何故か自然に描けてしまつこの世界のメゾン文字を使い、これまた初めて見る羊皮紙に、山崎真、と書いた。偽名を使っていいとしても、別に、本名で良いだろう、そして、出身地には二ホンと書いた、やつぱり本当の祖国を書いたほうがいいしな…と真は思いながら書いた。

「…よし、ソラ書けた?」

「ばつちり」

横を見るすでに紙に、ソラ、と名前を書いていた。

俺が決めた名前だから、本名なんか分からぬが、例え違つていても偽名がOKだから、別に関係ないが、真はそう思いながら、自らの名前を書いた紙を受け付けに提出した。

「ありがとうございます、次は、貴方達は一人でパーティーを組みますか?」

「パーティー？」

「単体での登録なら名前を登録すればいいけど、私たちは、一緒に登録したじゃない、だから、私たちみたいな複数の場合、チームとして登録すれば、何かと便利じゃない」

ふーんと真はそんなものなんだと思い、すぐさま〇〇を出した。

「では次に、この水晶玉に、血を垂らしてください」

「…血？」

痛々しそうな言葉に、真はついついそう呟いた。

「真、ギルドに登録するには、正確な個人情報を特定する方法として、血をもらうのが一番の手段なのよ、この水晶玉はね、特別仕様で、血を垂らせばその人特有の血を認識してくれるの、そうすれば、もし、ギルドで登録した人が犯罪に走って、ギルドから抹消された後、その犯罪を犯した人が、生活苦で、またギルドに登録するために偽名を使っての登録を防ぐためにあるの、それに、この水晶玉を元に、私たちの強さを、図つてくれるって言つすぐれものだよ」ソラが得意げに、そのことを説明してくれた。

「そうです、当ギルドでは、個人の管理のため、血をもらいます、その代りそれらから得られた情報等は、このギルドが誓つて守ると約束します」

「…」

真はやるしかないな… そう思い、受付の人へ渡してくれたナイフで、指をちょっと傷つける、元の世界の真だつたらそれすら躊躇してできそうになさそつだが、精神が弄られた影響でそう言つのは全くなかつた。

「…で、血をこの水晶玉になすりつけばいいのか？」

「はい、それではれて、登録が完了となります」

「…」

真は恐る恐る、自らの指からぷくっと出る血を水晶玉になすりつけ

た。

「かつ」

と、水晶玉一瞬光つた。

「はい、登録完了ですね、そして、これがあなたの身分証明書です、これを持つていれば、ギルドの依頼や、ギルドの庇護も受けられ、ダンジョンの出入りも自由、各国の関税も通りやすくなります、ギルドランクについてですが、これは下からG、そして最上級のSSSまであり、ランクによって、受けられる依頼も違います、ランクを上げるには、依頼を達成した後、ギルドにきていただき、依頼内容に沿って、ポイント制で徐々にランクを上げていきます。そして、下の方に貴方の強さが…って弱…いくらなんでも弱す…あつなんでもありません、どうぞ」

「…」

もう人に聞こえてもらいたい悲しんだ真であった。

銅板の下には、活字印刷の「じとく、丁寧なメゾン文字が魔法で彫られて落られており、じつやう、強さが書かれていた、よやくするところだ。

種族	人間	ヤマザキ	マコト
出身地	二ホン	ヤマザキ	マコト
職業	なし	ヤマザキ	マコト

魔力 なし

攻撃力 3

防御力 4

魔防御 4

祝福 なし

加護 なし

ギルドランク G

「…」

真はどうやら真のあまりにもの弱さに痛い目を見るような受けさんの視線をかわしながら、そこに書かれていた項目を見ていた。そして真は、どうやら強さを測ると言うのは、俺が開くウインドウズの劣化版みたいな物のようだとこれを見ながらそう思った。

しかし、加護、職業、魔防御と言う自らのウインドウズには書かれていなかつたはずの項目もあったことから、あながちただの劣化版とは言えないのではないかとも思つていた。ちなみにギルドランクについては、ファンタジーものによく読む真にとって、どのようなもののかは察しがついていた。

「ふふん、どう、真？みしてみして！」

どうやら同じく登録を完了したとおもわしきソラが近づいてきた、どうやら真の強さに興味に興味があるようだ。

「…ソラ、いいかい、世の中には知らない方がいいといつことじだつてあるんだよ、だからね、今回は勘弁」

「もう、いつも真つて、私がいつも、どれくらい強いのって言つても効いてくれなかつたし、何で教えてくれないの…！」

ソラがそう言つて抗議する。

「いや、だつてそう言われても言いたく…」

しかし真はその言葉を言い続けることができなかつた。

「奪つたり！」

隙をついてソラが真の身分証明書を真から奪つたからである。

「つてあ！」

（いつの間に）真はソラのあまりにもの素早い動きにさう思つた。

「どれどれ

「やめて！みないで！…」

真がそんな恥ずかしい声を出しながら慌ててソラから身分証明書を奪い返した

「…真」

しかし…

「…大丈夫、私が居るから、『プロリンクよりよわくたつて…私は眞の味方だから』
遅かったようだ

「のわ――――――――！」

眞の悲鳴が、ギルド中に響きわたつたのであつた。

「…で、真これからどうする、宿に泊まるためにも、資金を稼がなくちゃいけないけど」

ソラが言つた。

「うん…それだね…正真、俺の世界の物を売れば、簡単に資金なんて、稼げるけどね」

「まあ、それもそうね、で真？どうこうつものを売るの？」

「うん…マジックペンにするつもつ」

「…まじっくぺん？」

「まあ、みてくれればいいぞ」

眞はソラをなだめた後、マジックペンを大量に召喚するべく、呪文？を唱えた。

「山崎真が告げる、スーパーに山づみにされていた、マジックペンを召喚せよー！」

真がそう言つた瞬間、田の前に忽然と、突然車輪がついた棚が表れ、その棚の上には、3色どれでも50円！…というフレーズが書かれた、段ボール箱の中には、赤、青、黄色のマジックペンが大量に置いてあつた、100本ぐらいあるだろうか。

「わー、真つてつべづく思つけどこれだけは凄いよね、で、これって何かな？」

ソラが…おそらく「冗談なのだろうが、ちょっとばかり酷いことを言いながら、マジックペン（青）を取り出した。

「えーと、ソラ、確かにこの世界つて、書くものと言つたら、墨や、羽ペン、それと魔法墨位しかなかつたんだよね」

「うん、一般の人が使つているのは殆どが墨ね、カラフルな色が出せるのは高価な魔法墨だけね、使えるのはお金持ちか、貴族つてところね」

「…よし、じゃあ、ソラ、ちょっとそのペンかしてくれないかあ」「え…ううん」

ソラはちょっと戸惑つたようマジックペン（青）を真に渡した。
「よし、じゃあソラ、まずマジックペンの使い方として、この蓋を外す」

真はそう言つた後、ぽんと、マジックペンのふたを外した。

「おー、面白いね」

「次に、この… そうだな、この特殊なインクのついた所をこうしてこういう所にこすりつけば」

そう言つて真はマジックペンが大量に入つた段ボール箱にメゾン文字で、どうだ？ 憐いだとマジックペンで書いた。

「…うそ… そんな簡単に、かしてかして…！」

ソラがうるたえながら、真のマジックペンを奪い取つた。

「きゅきゅきゅきゅ」

そう言つて、ソラは夢中でマジックペンを書いた。

「…」

「…」

そして、一時の沈黙？が訪れた

「真」

「はい？」

「…これは凄いわ、下手したらペン革命が起こるかも」

「…それは凄い」

真はマジックペンだけでそんな反応をするソラの顔を見ながら、苦笑いを浮かべていた。

「まあ、とりあえずソラ、結構これどこに売ればいいかと思つ?」「真はとりあえず、マジックペンの説明をした後、ソラに向かって言った。

「うん…こま思いつくな最善の手段としては、やっぱり文房具とかを専門に売っている店に行くしかないよね…」

ソラがそれしか思いつかないことにう感じて、言つた。

「…文房具屋ね…」

異世界でもそういうのが有るんだと、真は思いながら、とりあえずソラの案に乗ることにしたのであった。

そして十分後

「おおーーー！れはじーの国のお物ですかね？」

案の店員を驚かしていた。

「はー、このマジックペンは、わが誇りある祖国、日本国独自の技

術で作られた、今までの羽ペン等に変るペンであります、わが国でも珍しいもので、どうぞ、一つ一銀貨でどうですか？」

真はソラと打ちあつた際、一応日本国と言ひ国で作られたといふことを強調しておくれことで、体面を建てるべく、そのようなセリフを言つた真であつた。

ちなみに、この世界はキチンとした10進法であります、

一円玉の役田は、石貨で

5円玉の役田は、白石貨

10円玉の役田は、重石貨

50円玉の役田は、白重石貨

100円札の役田は、鉄貨

500円札の役田は、白鉄貨

1000円札の役田は、銀貨

5000円札の役田は、白銀貨

10000円札の役田は、竜石貨

そして、100万円が金貨らしい

そしてそりて上の白金貨が、なんと一億円…

正直この制度を聞いた時は、とてもじやないが、白金貨なんて持ち歩けねーよ、ていうか一般の店でつかえるのか？と思つた。そして、ファンタジーのくせして通貨だけは徹底してゐるなと思う真でもあつたが、ソラにそのことを聞くと、確かに、名目的にはこんな感じだけど、結局はこの世界の通貨価値は現代日本よりも不安定で、例えば、白銀貨の価値化下がつたりしたら、なぜか銀貨の方が高くなつてしまつという現象が起きてしまうらしさことから、そこまで徹底されていらないらしい。

ちなみにこの世界の平均的な職業である農民の平均年収は白銀貨5枚らしい、そして、この段ボールの中には百本ぐらいのマジックペンがある、つまり、一気に農民の2年分の収入を見込めると言う、

凄まじい結果になるのであるが…

「いいでしょ、このまじっくべんとやりますばらじー、むじるー
銀貨ですむとは…ぜひ買に取らせていただきたい…」

見事に交渉成立であった。

「…」

「…凄いよ真…みて、白銀貨が10枚…もう、遊び呆けて暮ら
せるよこれ…！」

「…確かにそうかもな」

真も、予想以上の稼ぎに半ば呆然としながら白銀貨を見つめていた。
農民の皆さんすみません、真はそう思っていた。

「で、どうする？」のままこのお金で家を買って、ここで私と一緒に
定住生活送る？』

ふふふつと、ソラは真に向かっていたずら下な笑顔を向ける。

「いや、それはダメだろ、お前の記憶を取り戻すためにも、ここに
定住で言つわけにもいかんだろう」

「ふふふつ『冗談よ冗談、それじゃあ、一つ今日泊まるホテルを決め
ようか？今までわざわざこの街はまで急いできたのも、真が寝袋で
寝るのですら耐えられないうえ、寒いとか言つてたからだしね」

「…悪かったな」

真はソラの言葉に反抗するためそつに詰つた。

「…」

商人はマジックペンを見つめた。

「…二ホンとか言つていたな」

商人はマジックペンをしげしげと見つめた後、真達が去つて行つた通りを見つめた。

「…どんな国かは知らないが、これは儲かりそうな予感がするな」

商人はそうつぶやいたあと、文房具屋に入つて行つた。

「…！」にするか

真は、とりあえず、ソラに希望により、真の目の前には、このシュー
ートラスという町で、一番豪華らしいホテルがあつた。

外見としては、レンガ造りの3階建、如何にも中世ヨーロッパ的な建築美、ケルン大聖堂の小型版ともいいくべきかまあとりあえず、そこまで大きくはないが、豪華な屋敷であつた。

「…まい」

真はとりあえず、恐る恐る開いてみた、こんな豪華ホテルなど泊まつたことなどないからである、すると

「…いらっしゃいませ！…」

行きなり、猫耳＆メイド服の美女がそう言つて来たもんだから真はちょっとばかりうろたえた。

「あ…あ？」

（すげーモノ本のネコ耳メイドさんだ）

真が驚いていると、それに見かねたソラが、代わりに受付のネコ耳メイドさんに話しかけた。

「あのすみません、とりあえず一泊したいんですが、おいくらでし

ようか」

そんな真をおいてきぱりに、ソラが言った
「はー、一泊一銀でいります、朝、昼、夜等の食事をする場合は、
これに5白銅貨を上乗せします」

(…ひひやー、高け…)

金銭感覚が狂いそうだな、真はそう思った。

「わかりました、じゃあ、これで」

そう言って、ソラは二つの間に真の懐から取ったのか、三つの銀貨を真の財布から取り出すと、支払を行った。

「ありがとうござります、では、部屋をいき案内します、ついてきてください」

やつ面つて猫耳メイドさんは真たちを誘導していった、

「…」

真はジーと案内をする猫耳メイドさんの耳や、尻尾を見つめていた。
(すげー本物だ、秋葉のロスプレビンの話じゃないし、やべーもふもふしてみたいわ)

ソラは猫耳メイドさんを見ながらそんなことを思ひ浮かべていた。

「真、なにメイドさんをじろじろ見てんのよ」

しかし、ソラによつて、開けなくその妄想も終焉を迎えたのであつた、

「わー凄いー！」

「おー、ホテルは別に現代日本とそんなに変わらないだな、普通にベットだし」

まあ高いからだと思ひたどり

真は布団をトランポリンにして遊ぶソラを見ながらやつめた。

「うそ、やつぱりベットは良いわ、うん」

「…」

真はホテルの室内を見渡した、一つのベッド、下に引いてある高

そうな絨毯、御化粧台とおもわしきモノやら、本まで置いてある。

「あー真」

ソラが何やら思ついたように真の名を呼んだ。

「どうしたソラ」「

何やらにやにやしているソラにを見ながら真は言った

「もしかして、ベットが一つだったらよかつたのになーなんて思つたり?」「

「…」

真は美少女と一人でホテルに泊まると言つのに、そのことを考えてもみなかつた自分に悲しみを抱いたのであった

真たちはとりあえずホテルを確保した後、防具やら剣を見につてみた、近代兵器を使つ真にとつて、剣は不要かと思つたが、せつかくファンタジーな世界にきたのだから、武器屋に行かなくては損だろ?とおもこ、行くことにしたのであった。

「…ねお、マジで剣とかが売られてる」

まず、真たちは最初に言つたのは、ホテルから近かつた武器屋であった。

剣を一つ呑わせた看板に、武器屋とメゾン文字で書かれてある、まさしくファンタジーだ、そう思つた真であつた

「真、そう言えば剣とか使えるの?」

鋼色の剣に、目を見開いて食い見るよう観察する真を見たソラは、疑問に思つたのかそう言つた。

「…うん…なんて言つか…その」

真はすぐさま、全く使えません!ってへーなんて恥ずかしく言えず、何とか話をすらそつとした。しかし…

「おー、話をすらそつとしてんじゃないぞ小僧、その体を見る限り、使えないにきまつておらうが!…」

突如不意を打つよつに来襲した男のどなり声によつて、真の野望は粉々に破壊されたのであつた。

「へ？ ちよつえ？ だれ？」

そう言つて真とソラは声のした方向を向いた、そこには、如何にもファンタジーな世界で武器屋を経営しているぞ！！と宣言しているような、身長190センチの長身の、あり得ないほど迫力満点のマツチヨなオヤジが居たのであつた。おそらくこの作品がワ〇ピースであつたならば、後ろに、ドーンとこう文字がでっかく書かれていたであろう、そして何やら服の所に店主とわざわざ丁寧に描かれてあつた。

「…如何にもファンタジーみたいな店主だな」

普通ならその気迫に押されそつたが、案の定真は精神をいじられたので、恐怖心を感じられず、ぼそつと、素直に思つた事を口に出したのであつた。

ちなみに、ソラは震えていた。

「ほつ、そんな軟弱な肉体をして、震えあがらずにおれるとは、心は確かにようだな」

ファンタジーな店主そつと同時に胸を強く叩いた、正直言つて、怒鳴るつているのではないのか？と思つてしまいそうな大声であつた。

「…はあ、まあとりあえず、俺にでも使えそつな、武器とかないかな？ できれば彼女にも」

その声にもひるむ事せんなく、自分はお客様だし、頼めば案内してくれるだらうと思つてしそう言つた。

「…ふふふ」

しかしその返答は何やら無氣味な笑い声であつた。

「…まあ？」

真はどうけた声でぽカーンとしていた

「ふふははははははははは、根性あるな小僧、大抵の者は俺の声

を聞いただけで怯むのに、おぬしは全然そのそぶりを見せない、なんだ？もしかしてお前は何か特別な理由でもあるのか？」

ファンタジーな店主は笑いながら、自らが疑問に思ったことを真に問いかけた。

「…いや、別に」

まさか異世界人ですよとは言えない真は、必然的にそういつしかなかつた。

「…ふん、まあいい、しかし初見で俺に対して堂々と喋りやがったのは、そういうの…しかも、お前さんは全然戦闘経験とかなれやうにだ…」

また話がループしそうだ、そう思つた真はとりあえず、初期の目的である自分にも使えそうな武器の所え案内させてもらつため、話を元に戻すことにした。

「とりあえず、店主さん？でいいですか、できればこんな風に雑談するより、今すぐ自分や彼女にも使えそうな武器が有る場所に案内してほしんですが」

真はこれ以上探求されてはたまつたものではないので、強気でそう言つた。

「おおつそつだつたな、ふふふ、堂々と喋るだけではなく、意見までもしたか、面白い奴だ、付いてこい」

（お客様を相手にする態度じゃないよな…）

今更ながら、ファンタジーな店主の現代日本では考えられない態度に、そう思つた真であつた。

「で？具体的にどんな武器が良いんだ？言つとくけどお前には剣は無理だぞ、見るだけで分かる」

「…まあ、一応護身用の短剣とかないですか？なんか、魔法の付属効果がついた短剣とか？」

「ここはファンタジーね世界だし、真はそんな短剣が有るかも知れないと思い、真はそう言った。

「確かにあるが、あれは高いぞ、短剣でも一個一銀貨はするぞ」
（…結構高いな）

しかし、普通の短剣の相場など知らない真は、とりあえず、隣にいるソラに聞いてみた

「なあソラ、買つても良いか？」

「…いや、別に良いじゃない？お金もたくさんあるし、贅沢しちゃいなさいよ」

なにやら、そこいらへんに置かれてあった高そうな剣やらクナイ？の様な武器に夢中ぼいソラはそう言った。

「…それじゃあ、そいついつ」と、とつあえずじつこいつのか見せてくれませんか

「…分かつた、ちょっと待つてくれ」

そう言ってファンタジーな店主は向やら店の奥へ行った

数十分が経過した

「すまんすまん、遅れてしまつた、これなんかどうだ？」
そう言つて、ファンタジーな店主は向やら、埃をかぶつている短剣を差し出した

「これは、俺が作った中で力作だつた魔短剣だ」

「…これは…どう言つ感じの短剣ですか？」

真は言った

「おう、この短剣の付属効果は、俊敏さアップだ

「俊敏さ？」

真はファンタジーな店主の言葉をじだまのよう繰り返し言つた。

「そう、俊敏さだ、お前はまったくと言つていいくほど、俊敏さがな

さそり…いやないな、そんなんじゃ正直言つてやばいからな、奇襲でもされればこうつと死んじまうぜ、だから、お前が一番よさそうな魔短剣はこれが一番なんだよ！」

そういうつてファンタジーな店主は短剣を真に手渡した。

「…」

短剣と言つても、真は触つたことなどないので、いろいろ観察して見たが別にこれと言つたことはなつた。

「確かに、このような魔道具つて、なんか使い捨てが多いとか聞いたんですけど、そこら辺は大丈夫ですか？」

真はソラが言つていた、魔道具は高くて使い捨てが多い」といつ言葉を思い出し、確かめるべくそう言つた。

「ああ、おいおい、もしかして、お前さん魔道具と、この魔短剣を同じようにみてているのか？」

「…いや…その」

真は言葉に詰まつた

「…ふん、まあいい、その顔を見る限り、よく知らないんだろう、よしじゃあ俺が一から教えてやる」

ファンタジーな店主はそう言つた

「いいか、魔道具ツつのは言わば魔力やら、魔術師の想像力を補う、言わば魔術師の力を強める効果を持つ道具のことを言つ、これら魔道具は一部を除いて使い捨てが多い、だぶんそこからお前の耳に入つたんだろう、そして、このような魔短剣についてだ、これはな、力具と呼ばれているんだよ」

「力具？」

真は初めて聞いた言葉にはてなの文字を浮かべながら呟いた。

「力具言つのは、いわば、持つているだけで力がつける物のことと言つ、この短剣は、威力とかそういうのは普通だが、その付属効果は魔道具と違い、半永久的に使えんだ、まあそんなものって言う事だ、他に、付属効果だけじゃなくて、武器自体が魔力を帯び、魔力がない子供が降つたとしても、風の刃を自動的に起こすような物

もあるが、これは魔武器と呼ばれている、まあいわば究極の武器つて感じだ、もつとも、魔武器だなんて滅多に市場に出ないがな、ちなみに「うちは扱っていない、これでいいか？」

「…」

つまりなんだ、魔術師の力を上げるのが魔道具で、「これは一部を除いてインスタント式、力具や魔武器は半永久的に使える、そんなかんじかな、真はそう思った。

「ほう、その顔だと、どうやら分かつたみたいだな、普通こんな簡単なことを分からぬ奴などいはずだが、どうせ意味ありなんだろう、深くはつつこまん、お前は俺のお気に入りだしな」

なんだか頼もしく見えてくるファンタジーな店主であった。

「ありがとう」ゼコム、そう言えば俊敏アップで言つのを出すにはどうしたらいいんですか？」

「ああ、それなら、短剣に対して血を垂らせばいい、力具の中には別に普通に身につけるだけで効果があれられる奴もあるが、魔法の加護がついてある剣などの加護を受けるには、自らの血を垂らすことによつて、初めて効果が得られる、別名、武器との契約とも言われ、血を垂らせば、魔法の加護は所有者にしか受けられない、仲間を巻き込んでの加護の場合は、仲間に加護を与えるがな、まあ、その短剣の様な奴の場合は、契約することによつて、ようやく得られるタイプだ、どうだ？大サービスとして、銀貨三枚だ」

「…」

まあ、確かに、自分は俊敏さに欠けていることはある、これから旅行にもされは付きまとつだらうし、だからと言つて今すぐ鍛えるわけにもいかない、ならば、これは買った方がいいだろ、真はそう思つた

「分かつた、買おう」

「おう、ありがとさんよ」

ファンタジーな店長は、なんだか嬉しそうに言つた。

「次は防具なんだけど、店主さん、なにか先ほどの短剣みたいなお勧めはないですか？」

「真は買つた短剣をとりあえず懷にしまつた後、今度は身を守るための防具を買うたそう言つた。

「うん…防具か…今革製の防具の生産地がドラゴンに襲われちまつてな、最近こなくなつちまつたから、手ごろな防具がねーんだよな、だから残念ながら防具は今ほとんどないんだよ、有るとすれば、鉄でできた重い盾ぐらいか、それ以外は、どうしても力具になつちまうからな…お前さん、力なさそつだから、鉄のような重い盾なんて持てないだろ？しかも、力具の防具つ言つのは需要が高い、そのため、どうしても高くなつちまつ上、いまこの店には少數しかない、すまないがな」

「そうですか…じゃあ、鉄の盾を持てるようになれるような、力具はありませんか？」

幸いにも金はあるので、真はこの短剣の俊敏さアップのよつに、もしかしたら力アップがあるかもしれないと思つ、そう言つた。

「うむ…そんなものないな、今のところ力具はこの店では五つしか扱つてない、その五つの中に、力を強めるものは残念ながらないな（じつやらそんな都合よくないみたいであつた。

「…わかりました、ではいろいろとありがとうございました」

ほんの一瞬、その五つある力具を全部買ってみようかなと思つた真であつたが、いくらなんでも、そんなことをしたら、何だか自分が金持ちで傲慢な人間みたいだし、店長さんの機嫌が悪くなるかもしれないかと思い、これぐらいが引き際だと真は思つた。

（じゃあ、なにか防具の代わりになるようなものでも召喚するか…）

「わかりました、いろいろありがとうございます」

「おうよ！…今度防具用の力具仕入れたら、また来てくれよ！」

言葉だけ見れば別に普通に別れを言つてゐるだけのように見えるが、その実態は怒鳴るような声で怒つてゐるようになつてゐたのであつた。

(あの人は声の手加減と言つのを知らないのだらうか……)
真はそう思いながら、ソラの所へ行つた。

「……で、ソラは何か買つの？」

真はとりあえず、色々剣なんかが置かれある場所にいたソラを見つけた後、何か買つものもあるのかな？ そう思い話しかけた。

「え？ ああ、それならもう済んだところ」

そう言つて、ソラは戦利品？ のように買つたと思わしきレイピアを見せつけた。

「……あれ？ 財布俺が持つてたよね」

「ふふふ、真から金をくすねるなんて、ちょちょいのちょいよ」

鈴のような声でくすくす笑うソラを見ながら、今度から財布を厳重管理にしておこうと思つ真であった。

ダンジョンへの序章と、裏で進む陰謀

ダンジョン…

見た目は単なる洞窟であるが、通常洞窟とは凡とすっぽんくらい違う、その洞窟は別名、モンスターの巣とも言われている、一説によれば、モンスターはダンジョンより生まれるとされ、外にいるモンスターは、まだ見つかっていないダンジョンから表れると言わっている。

しかし、人々はダンジョンをこう呼ぶ、夢と希望の洞窟と…

なぜモンスターの巣であるダンジョンが夢と希望の洞窟であるのだろうか…それは、ダンジョン内のモンスターは、人間などに倒されるとき、それと同時に出す、ドロップアイテムと言われるものが関係している。ドロップアイテムは、この世界に必要な物資などで構成されている、そのアイテムは、塩などの日用品から、剣などの武器類、魔道具などの、魔術間連に至るまである、そのため、得られるドロップアイテムなどにもランク付けがあり、例えば、コショウの様な滅多にない香辛料はAランク、現代の様に、木で出来た物ではないが、簡単に出てくる羊皮紙、これはGランクである。このようになりますからGまでもあるとされている。そして、これらを入手するには、なにもモンスターを倒さなくてはならないということだけではない、他にもダンジョン内に何故か、忽然と現れる、宝箱によって入手できることだつてある。

そして、話は元に戻るが、なぜ夢と希望の洞窟なのか、それはこれらをダンジョン内で入手し、売ることによって、生計立てることができるからである、場合によつては高ランクのアイテム入手することができる、一攫千金にならうるからである。

文明レベルは中世ヨーロッパ（違うところもあるが）であるこの

世界において、農民などは食べるだけで精いっぱいである、行動しなければ農民たちは一生ろくな生活ができないのである。

彼らにとって、ダンジョンに入つて、一攫千金を狙う事は、まさしく夢の様な事なのである。そのために、農民の中でも腕の立つ者は、冒險者としてダンジョンを冒險する、また、この世界の人々のダンジョンに対する価値観が現代日本人とは異なると言つことも、原因の一つである。

さらに、ダンジョンの利点はそれだけではない、外と比べ、モンスターの出現率が有りえないほど高いので、ただ純粹に、力を求めたりするものも集まり、そして冒險心に駆られた物たちも集まる。

以上が、モンスターの巣であるダンジョンが別名『夢と希望の洞窟』と呼ばれるゆえんである、じつさいに、大きなダンジョンでは人が集まり、町が形成され、通称、ダンジョン町と呼ばれるものを形成することもある、ショートラスも収入の半分以上が、ダンジョンによるものである。

買い物を終えた後、ホテルに帰つた真は、明日行く予定である、ダンジョンの事を思い浮かべながら、ダンジョンとは何なのかを頭の中で整理をしていた。

「で？明日ダンジョンに行くんでしょ？」

ソラがお化粧台にあつた、ブラシで髪を落かしながら言った。

「うん…まあこれからのことのためにも、まず力をつけないとけ

ないし、ダンジョンの一階田は戦闘の初心者にとつて、とても都合のいい場所らしいし、そろそろ、近代兵器操作術を体験してみないといけないしな、それにさ…」

真は何故か弄られたはずの田の心の中に、浮かんできた事を言った。

「なんだか、ダンジョンって冒険心に駆られるしな

「…」

「…」

一瞬間が空いた。

「…ふふふッハハハハ！ 攻撃力が4の癖に」

ソラがそんなひどい事を言つた。

「…それを言うなよ、それに俺は攻撃力だなんて関係ない、近代兵器の強さぐらい教えてやつただろう」

真は、今まで召喚した物の中で唯一武器である拳銃を見せつけた。

「はいはい、だけど真、たまが勿体ないとか言つて結局いつまでたつても、そのけんじゅう、私の目の前で使わなかつたじやない」

「…うんまあ、それもそうだけど」

ソラの的確な質問に真はちょっとばかり言葉を詰ませた。

「なんていうかその…この武器は扱いにくいといふか、まだ俺はこの武器を完璧には使えこなせないんだよ、だから、明日、他の俺の完璧に操作できる武器を召喚して強さを見せつけてやるから、期待してろよ…！」

真はとりあえずそう言つた。

「はいはい、そのキンダイヘイキつていうのがどれくらい強いか、明日確かめさせていただきます、楽しみにしてるわよ」

ソラは笑顔で真にそう言つた。

「…」解、そう言えばソラ

「ん？」

「このギルドカードに書かれてある、職業とか、どういう意味なの

かわかる?」

「うん…なるほど、真は異世界人だし、無理もないか…じゃあ説明するね」

ソラはそう言つと、自らのギルドカードを提示した。ギルドカードにはこう書かれてあった。

ソラ

出身地 不明

種族 人間

職業 魔術師

魔力 100

攻撃力 18

防御力 23

魔防衛 40

祝福 なし

加護 なし

ギルドランク G

「…」

「ほら、落ち込んでないで… とりあえず、このギルドカードの説明はね」

真は自らのウインドウズにものつていなかつた魔力が出ていたのに、ちょっととばかり驚きながらも、とりあえず、自らの数値の劣等感に、愕然としたのであつた。

「まあ、職業なんだけど、有名なのは、剣士、魔術師、槍使い、弓

落ち込んで着る真を宥めながら、ソラはそう言つと、まず職業の欄を指差した。

「まず、職業なんだけど、有名なのは、剣士、魔術師、槍使い、弓

使いとがが有るの、これらの職業を持てば、それぞれ、剣の使い手、魔術の使い手であるという事が、分かるの、特に使い手のない人は、なしつて付くわね、因みに、複数持つている人もいるけど、それはもう才能の問題だからしたかないのよね、まあ、魔術師になるにも才能の問題だけど…」

ソラはいったん一息ついた後、また口を開いた。

「まあ、とりあえず、職業は自らの得意な物を表しているのよ、そして、自分がやっている、職業のことも指すの、例えば、町を守る騎士なんかは、自らの得意分野である剣士、そして自らの職業そのものである騎士、と言う感じにギルドカードに出てくるのよ、まあ、職業についてはこんな感じ、分かった？」

ソラは真がちゃんと理解できたのかを、確かめるべくそう言った。

「うん…まあ、つまり、職業と言つのは、自分の得意分野であるものと、次に自分が付いている、職業である、こんな感じ？」

「そう、職業については簡単に言うとそんな感じ、そして、他の、攻撃、防御なんだけど、これは名前の通り、攻撃はその人の力を表しているの、そして、防御はその人の耐久力かな？これが高いほど、攻撃を受けても耐えることができるの、因みに、攻撃と防御はね、人間の中にある、気、と言うのが関係しているの」

ソラはいったん話を区切った。

「氣と言うのを簡単に説明すると、通常この世界の生き物の中には、氣と言う特別な力があつて、この氣を操作することによって、例え私の様な女性でも、男以上の力と防御を持つことだって可能なのよ、つまり、私のこの数値は、氣を操作している時の力を表しているの、攻撃や防御を上げるには、如何にこの氣を自分の体にあつたように動かすのかが肝心なこととなるの…と言つても、そんな毎日氣を使つていいわけでもないし、それにこの世界の戦闘を行つてている人たちにとつても、疲れるのよ、氣を使うのって、だからいざとな

つたら時しか使わないし、どんなに気を操るのが得意な人でも、気のみでは、攻撃防御共に40くらいで、なかなか上がらないのよ、あまりにも上がらないうえ、気を使って戦闘したあとはあり得ないほど疲れるから、みんな気を鍛えるのを早々にやめて、力具を使って身体能力を上げているつていうのが現状だけね」

「…」

「それに、魔術師の場合、攻撃と防御は、扱う魔法によって変わるの、例えば、攻撃的な魔法が得意であれば、それに準じて攻撃力が上がるし、防御的な魔法を得意とすれば、防御力が上がるの、例え気が弱くてもね」

ソラが追加するよつにそう言つた。

「…」

つまり、この世界の人間には魔力のほかに、おもに身体能力のみを上げる不思議な力、気、と言うのものが存在するのか…と言つても、それを操るのは至難の技らしいけど…そして、気には限界がある、と言う事か…

真はソラの説明を聞き、そう思つた。

「気についての説明、分かつた？」

「うん、まあ、なんとなくだけど、それで、その気と言うのは俺にでも使えるのか？」

真は今は魔力がないので魔法は使えないが、もしかしたら気を使って挽回可能かも！と思いつ、ソラにそう言つた。

「…うん…異世界人に気が使えるかどうかは分かんないけど、多分使えるんじゃないかな」

「お！じゃあ、ソラ気の使い方を教え…」

「あ！気の使い方を教えるのは無理だから、気と言うのはね、個性があるの、だから他人から気の扱い方を教わつても、まったく上達しないの、こればかりは自分で取得するしかないね…」

「…がくん

と真はうなだれた。

「ふふふ、まあ、とりあえずは次に魔防御、これは、魔術攻撃に対する魔防御の事、例えば、普通に切りつけるなら、魔防御がいかに高くて問題はないの、だけど、風の魔法を使つた、例えばエアーエッターで切りつけるとなると、魔防御が働いて、攻撃が相手に効かないって事があるの、いわば魔法攻撃に対して、特別な防御力を持つていることを指すの、ちなみに魔防御は気には関係なく、体内にある魔力によつて上がつたり、下がつたりするの、分かつた？」

（つまり、魔防御は、気と関係なく、魔力に関係するのか、俺の防御と魔防御が同じなのはそのためか…）

「…まあ、俺の世界にもこいつ言つ概念があつたからな…大丈夫だ」「そう、じゃあ次に加護や祝福はね、いわゆる神様から特別にもらつたり、ドラゴンみたいな、特別なモンスター や種族からもらえるの」

「え？ 神様？」

真はソラの口から出て来たその単語に、ビックリしながら答えた。

「うん？ 知らないの真？」

ソラもどうやら驚いた様子

「…いや、俺の世界にも神様はいるが、実在はしないのだが…もしかしてこの世界では実在するの？」

「…どう言つ事？」

ソラがあまり理解できないような感じに、頭をかしげながら言った。
「だから、俺の世界の神様は架空上だけ、この世界には神様は実在するのかってこと」

「…」

「…つまり、真の世界には神様はいなつてこと？」

「人によつてはいると考えている人もいるけど、少なくとも俺は存在しないと思つ」

時々、神様、どうかテストの点数が良くなりますが、うつとか願うけどな、真はそう思いながら言つた。

「…なるほどね…さすが異世界、魔法がないどころか、神様が居ないだなんて…いいわ、この世界において、神様がどういう存在なんか教えてあげる」

どうやら、この世界には神様は実在するようだ、真はそう思いながらソラの言葉を聞いた。

「まず、神様つて言つのは、この世界には数多いるの、例えるのなら雷の神、トールの様な自然現象をつかさどる神、それと、特定の地域だけで信仰されている土地神とか、場合によつては、特定の人々や種族の信仰対象にされている、神ではないけど、龍とかだね、これらが神と言うのも、あと、悪魔とか、天使とともに、神様ではないけど、近い存在、これが、私たちの世界に実在する神様と、神様に準じたなにかなの、他にもあるらしいけど、さすがの私もこの世界のすべてがわかるわけじゃあないから」

「…」

とりあえず、この世界には神様とやらが実在することを確認した真であった。

「真、もうそろそろ寝るよ」

ギルドカードの説明がある程度終わつたあと、ビーツや、眠くなつたらしいソラがそう言つた。

「…なあソラ」

「ん？」

「せっかくこいつしてホテルに泊まつたんだからね、もつちよつと起きてよつ」

真は、携帯の時計の、8：00の部分を指した。

ちなみにこの世界にも時計がある、と言つても、真の持つてゐる携帯のようにデジタル方式ではなく、アナログ方式の時計で、振り子時計が一般的らしい。

ちなみに「ソバにすでに下べビア数字を読む」とかでもない。もう驚かねーよ、そう思う真であつた。

「ん？ ちつとも遅くないけど……」

現代人にとっては、まだまだこれからだと言う時間帯だが、この世界ではそうではない、事実、このホテルに使われている照明器具は、なにやら、紫色の未知の蠅でできた、眞の世界の？燭より、なぜか結構明るい蠅燭が主流である。しかし、それでも現代の電灯ほどではないので、昔の人のように、この世界の人たちはこれくらいの時間で寝るのである。

「……いいか、ソラ、俺たちの世界では17歳は普通早くても、11時くらいに寝るのが常だ、今まで碌な部屋もなかつたから早めに寝ていたが、今はこの様に現代とほぼ変わらない部屋にいる、と言つことは……」

真は、さうそくの光に不気味照らされながら言つた。

「...ん?... ど、どうせ?」

ソラは頭に？を浮かべながら呟いた。

ソラは真が向いている方向を向いた。

そこには…ベットがあった。

ソラが突然驚いた様子になつた。

「ままま…まさか、え？え？そんな、エロ…」

「カードゲームでもしようぜ…！」
ナニかしら勘違いしていたソラであった。そして、如何にも真らし
い意見でもあつた。

「よつしゃー！あつがりー！」

ソラが、ダイヤの2とクローバの2を同時に捨て、そつ宣言した。

「…なぜだ…なぜそんなにも強い」

ちなみに今やつているのはババ抜きである、やり方については、ど
うやらトランプの様な遊びぐらいなら、この世界にもあるらしく、
天才なソラは、すぐさまやり方を覚え、いつの間にか教えていたご
本人が連戦連敗であつた。

「ふふふ、お主もまだまだじやのう、なんぢやで」

ソラは鈴の様な声で、笑いながらそう言った。

「…もう寝ようぜ、疲れた」

「だめ、今度は七並べよ、もう、このトランプゲームつて、楽しい
わ」

「もう、マジ勘弁」

結局ソラがついに眠くなつて終了した、11時まで連戦連敗し続け
た真、哀れなり。

所変わつて、これは真たちがトランプゲームで盛り上がつてゐるところ、とある場所にある館の中、その館の中央の部屋に、一人の中年くらいの男性商人と思わしき人物が集まつていた。そして、その中年くらいの男性商人の片方は、あの文房具屋の店長であった。

「これは……素晴らしい、一体この様なものをどこで手に入れたのですか」

もう片方の中年くらいの男は、歓喜の声をあげながら、同時に自らの頭の中に浮かんだ疑問を、文房具屋の店長に質問した。
その中年くらいの男の前にいる、文房具屋の店長が持つていた物は、マジックペンであった。

「いえいえ、ビヨーシェ商人ギルドの頭、ヤークト・ロウンさんが驚くのも無理なからぬ事、これは、従来の筆記用具とは似ても似つかないほど、高性能なペンです、私は、まじっくペんなる物を複製することはできなかつといろいろ分解して見たりもしましたが、まづ、素材的に難しいという事に気づきました、このまじっくペんを主に「一テイリングしている、木でもない、岩石でもない、つまり、このマジックペンは新物質で構成されているのです」

文房具屋の店長は、ビヨーシェ商人ギルドの頭、ロウンの問いを受

け流し、自らが持っている、マジックペンのすごさを語った。

恐らく、文房具や店長が言っている、新物質とは、マジックペンで使われている、プラスチックのことである。

「確かに、そのような物質見たことがない、何十年も世界中を旅してきた私ですらもな…とりあえず、ヤルトーヨ、商品を紹介して、私のこのまじっくべんとやらに対する注目を上げるという意図も分かるが、それより先に、私はね、一体どのようにしてそのような商品を100本以上も手に入れたのかを、聞いているのだ」

落ち着いた様子で、ロウエンは文房具屋店長…ヤルトーに対してもことを聞いた。

「ロウエンさん、今から言つ事はとても信じられないとは思いますが、どうか、聞いてください、ビヨーシェ商人ギルドのにとって、利益を上げる為の重要なチャンスなのです、信じられると言いますか？」

「…いいだろう、信じよう

ロウエン言った。

「…実はですね、これをうちに持つてきたのは、別に、何処かの大商人でもなく、かと言つて、国が新開発したものでもない、何の変哲もない、17歳くらいの男女が持つて来たのだよ」

「な…！」

ビヨーシェ商人ギルドの頭のロウエンは驚愕の声を発した。

それはそうであろう、現代で例えれば、レーザー銃を、17歳の男女が持つて来た感じである、驚くのも無理はない。

「彼らは二ホンとか言つ国から來たとか言つていたが、聞いたこともない国です、おそらく何処か遠い果ての小国か何かでしょう、それから察するに、彼らはろくな護衛を持つていないのでないのではないか？と私は思いました、事実、密偵からの情報では、彼らは護衛の人や二人も雇つてはいないのですよ」

「…つまりヤルトーよ、君は何を言いたいのだね、はつきり言いたまえ」

恐らくヤルトーの意図が分からないのであらう、ロウンがそう言った。

「分からぬのですか? このよつたな素晴らしい商品を、百本以上も持つてゐる連中ですよ、詰まり、他にもまだ沢山、このまじっくペんを彼らは持つてゐるだらう、いや…きっとそれ以上ものも…持つてゐるに違ひない! ! !

ヤルトーは右腕を握りしめて言った。

「まじっくペんの様な物を大量に持つてゐるうえ、まともな護衛が存在しない、これは、正直いって、チャンスではないか? 奴らからまじっくペんの様な素晴らしい物を奪えば、我々ビヨーシェ商人ギルドの資金は潤い、莫大な利益を得ることが可能である、そう思わないでしううか」

ほゝ、と、ロウンの口からため息が漏れる。

「つまり、ヤルトー、その少年少女から、マジックペンを奪おうと?」

「そうです」

「…しかし可笑しいな、もし、相手が少年少女だけならば、別に我々ビヨーシェ商人ギルドに発表しなくともいいはずだ、あなたの部下たちで容易に片付くはず、利益もヤルトー、自分自身の身で独占できるのに、それとも、その少年少女とやらは、何か特別な力が何かでも持つてゐるのか?」

ロウンがそのことを疑問に思つたのか、そう言つた。

「ふふつそうですね、確かに相手がただの少年少女なら、別に私だ

けで片付きます、しかし、私は自らの利益を分散しても、同時にやりたいことがあるのです

「ほひ…それは何ですか?」

「…3年前、私はある冒険者によつて、私の所有する奴隸達が逃がされたのを覚えていますか?」

「ええ、確かに、あの奴隸は不法奴隸でしたですね、そのために逃がされても文句が言えず、結局逃がされてしまった事件ですね、それが如何したのですか?確かにあなたの奴隸を逃がしたパートナーは、相当の腕お持ち主たちで、とても貴方だけでは手出しできなかつたはずでは?それで結局は仕返しをあきらめた」

「そう、実はそのパートナーが今回、このジュートラスの町に来るのですよ」

「…ほう、つまり何ですか、その少年少女から奪つた高性能な物を分け与えてやるから、そのパートナーへの仕返しを手伝つてほしいと…」

「ああ、そういうことだ、ビヨーシェ商人ギルドの頭、ロウンさんならあの忌々しいパートナーを捕まえることだって可能だろう、そして、その報酬として、あのまじっくペんを持っている奴らから奪つた物で得られる利益の比率は、お前が7で俺が3だ、これでどうだ?」

「…いいのですか?それで…貴方にしては恐ろしいほど讓歩していますが…なにかそのパートナーを捕まえなくてはいけない、理由でもあるのですか?」

「…利益は比率で7：3だ、これ以上のことは必要はない

「…分かりました、では、さつやくそ少年少女の捕縛と、あなた
の復讐を手助けします」

「…ありがとうございます」

ヤルトーは笑顔でそう言つた。

「ちゅんちゅん」

何故か異世界でもお馴染みらしい、鳥の鳴き声と共に、真は起きた
のであつた。

「…」

もうひるん、ソラが真のベットに潜り込んで、すやすやと寝むつてい
る展開などもなく、そして、そのようなことも考へてもいなかつた
真であつた。

「…」

昨日は散々な日だつたなど、真は思い出していた。

「…」

真はどうあえず、ソラのベットを見た。

ベットの上にはソラが眠つていた、どうやら真の方が早く起きた様
子である。

「…」

「すぴー」

まるで天使のような笑顔で寝ているソラ、それは精神が弄られていた真をもってしても脱帽するほどの程の物であった。

「…かわいいな」

真はソラの寝顔を見ながら、考え深げにそう思った。

「…」これがこの世界の朝食か…別に変らないと思つけど…」

真は現在ソラと一緒に宿がだしてくれた朝食を食べていた。

「…」

真の目の前にはソルボージュという、スクランブルエッグに似た食べ物が置かれてあつた。

別に見た目も悪くないし、たんに名前だけが違つだけではないか？
そう思つた真であつた。

「ぜんぜん、別物よ、確かに味こそは別に真の世界の料理と変りはないけど、魔法香辛料とかが使われているから、うん…なんていうか、この魔法香辛料の違和感つてなかなか言葉に表しにくいのよね」とりあえず食べてみて

「それじゃ、いたただきます」

そう言つて真は横にあつたフォークを取り出し、ソルボージュを口に運んだ

「…」

もぐもぐと、真はこのソルボージュとか言つ食べ物の味を確かめるべく良く噛んでいたのであつた。

そして、ソラが言つていた違和感とやらが直ぐに訪れた。

「あれ？ん？なんだかあれだな、別にまずくもないし、どうやらかと上手いのだが…幻想的な味？」

「真はこの味を感じてもしやと思った。」

「いわゆるこの世界の魔法香辛料とやらは、言わば人間が作り出した香辛料である、自然が作り出したといつものではない、そして、どうやらこれら魔法香辛料を作る人たちは、どうしても口に呑うよくな、無理やり呑わせるような…不純物など一切なく、いわゆる人間の口に完璧に合つような…簡単に言えばあまりにもの完璧すぎて、カツブーラーメンみたいな程良い味ではないのである、まあ、まあしかし言葉で言い表しにくい、そんな違和感を感じる、そのような感じの味であつた。」

「…なあ、ソラ」

「ん？」

「…もしかして、自然からとれる香辛料、トウガラシとか、ゴシコウってとても高価なの？」

「もちろんだよ」

ソラが何当たり前のことをいつているんだと言つ感じに言つた。

「…マジックペンじゃなくて、香辛料にすればよかつたかな」

そう思いながら、真はソルボージュを口に運んだ。

「…よし、やつやくダンジョンで使ひ近代兵器を召喚するとするか」「面白やうね、異世界の武器ついどじんなのだらり」その後は別段なにもおかしなこともなく、真たちは朝食を食べた後、さっそく、今日行く予定のダンジョンへ向けての武装を召喚するため、真とソラはそんな話し合をしていた。

「…よし、まあ、山崎真が命ず、兵器大全集一を召喚せよ……」真はまづ、一八六八年までに使えたる兵器を調べる為、血りが知つてゐる本の中で、よつ兵器に関して詳しく述べていたものを召喚した。

「しゅあん」

いつもどおりに、ロープしたかのよつて、忽然と、戦艦三笠の写真が表紙の兵器大全集一と言つ本が召喚された。

「…ん？ その本は？…まさかこれが近代兵器…」

ソラがそんな的外れなことを言つ

「こやいや違う違う、これは近代兵器じゃなくて、ただの本、この本には俺の世界にある古今東西あらゆる世の兵器がのつてゐる、いわば兵器の専門書みたいなものかな？ 兵器の写真はもちろん、その兵器の歴史、評価、性能等一つ一つ丁寧に描かれてあるんだ」

真は簡単な説明をした。

「…ふんー、つまり、その本には真の世界の兵器が有つて、召喚する際に役立てようど？」

「まあ、そんな感じかな」

「へー、じゃあ、まず何を召喚するの？..」

ソラが面白やうに本を覗き込んだ

「まあ、今まで、そう焦んなよ、まず俺が選ぶから」

そう言って真はソラをなだめた後、兵器大全集1の1868年あたりのページを開いた。

（うん…一番使えそうな兵器は、やつぱりあの映画、ラストサムライにも登場した、ガトリング砲だよな）

真は本のページを開きながら心の中で呟いた。

ガトリング砲とは、言わば現代の機関銃の原型とも言つべき兵器である、といつても、現代の様に、持ち運べるほど軽くも小さくもなく、大ハ車の様な物に、でっかいバルカン砲をのつけたようなものである、もつとも、この世界ではそれでも結構な威力を發揮するであろうが…

（しかし、ガトリング砲の様な大きなものは、とてもじやないが、馬や車がないようじや、手軽に持ち運べるような代物じやないし、そのため、人力で運ぶ場合、ダンジョン内で、召喚すると言つ道しかないから、今は召喚することはできないよな…だけど、ダンジョン内に階段とかそういうのが有れば通行できないしな…）

真は思う思い、ダンジョン内にガトリング砲の邪魔になりそうな階段とかはないのかをソラに聞いてみた。

「なあソラ、ダンジョン内には階段とかある？」

「…階段？なんでまた？」

「うん…移動するのに大ハ車を使う武器を召喚したいんだよ、大ハ車じゃ階段を上り下りできないだろ？」

「…ダンジョン内には、階段は滅多にないけど、一階から一階に行くときは、階段を使うわ、だから、使うとしても、その階限定ね、大きさによるけど」

びみょ な答えが返ってきた

（うん…階段とかやっぱあるか、これは実際にみてみないと分かんないな）

結局真はガトリング砲の凹喰をやめ、次にライフル銃や騎兵銃などの、持ち運びのできる兵器を探した。

(うん…ヘンリー銃かスペンサー銃か…ここら辺が銃の良さそうなところかな…ん?)

その時真はある写真の部分に注目した、その写真には、銃剣が移されていて、銃剣とはいわゆる、銃の先っちょにナイフ見たいな簡易的な刃物をつけて、ライフル銃などを簡易的な槍にした様なものである。昔は弾がなくなると、白兵戦になることがあったので、昔の銃にはよくこういう機能が有つたのである。

(…銃剣って、近代兵器の部類に入るのか…分からんな)

真はとりあえず、一応、確認のためとして、この銃剣が取り付けられている銃ごと、召喚することにしたのであった。

(まあ、とりあえず、銃はヘンリー銃か、スペンサー銃かを決めてからにしよう)

真はそう思い、とりあえず、その一つの銃が有る場所のページを覚えた後、次に爆弾はどうなのか調べた

そして、ノーベル賞を作った人の写真と共に書かれてある兵器を見つけて真はふと思いついた。

(ダイナマイト…おっそうだ…)

真はあることは思いついた、

(ダイナマイト+どこでも好きな所で道具を使わずとも火を出せる火の魔法、これいいんじゃない?)

珪藻土ダイナマイトの欄を見ながら真はそのことを思いついた。

(よし、とりあえずは、銃は装填数が多いヘンリー銃に決定、ダイナマイトは、ライターを使えば手軽で簡単に使えるし、ライターを

使わなくても、魔法で火を出せるソラに渡せば、かなり使えそうだな、ソラにこの事を話してみるか）

真はとりあえず、武器の方針については大体固め、次に、結局手に入れるうことのできなかつた防具代わりの、戦闘服なんかを探してみた。

（うん…あまりないな）

もともとこの方は武器専用であり、やはり、防御面のみの戦闘服なんかはあまり書かれていなかつた。

（…まあこれでいいか）

真がそう思つた時に開いていたページは、米軍のボディースーツの欄であつた。防弾、防刃、そして耐衝撃性にもすぐれ、なお且つ動きやすく設計されてある、これでも良いかな？真はそう思い、防具の代わりとして召喚するのは、このボディースーツと、自衛隊の8式鉄帽（いわゆる軍用ヘルメット）にすることにしたのであつた。

「…よし、召喚するとしますか」

因みに現在の真の召喚数は6である、これらを召喚するのは当たり前だが、予備の弾等の弾薬も想定して召喚するなら、直ぐに使いつぶしてしてしまうような数であるが、仕方ない事だと、真はそう思ひ、腹をくくつて召喚することにしたのであつた。

「山崎真が命ずる、銃剣つきのヘンリー銃を召喚せよ！」

すぐさま真の前に銃剣付きのヘンリー銃が表れる

「山崎真が命ずる、自衛隊の88式鉄帽を召喚せよ」

まあとりあえず、こんな感じで真の武装が次々と召喚されていったのであつた。

「どうだソラ、カッコいいか？」

数分後、すっかり見た目は軍人と化した真が立っていた、このようになことになってしまったのは、決して作者のせいではない…はず…

頭には自衛隊の88式鉄帽（迷彩柄）胴体には米軍のボディースーツ（服の迷彩柄はさすがに怪しすぎるらしいので、素朴な灰色のバージョン）片手には銃剣付きヘンリー銃である。

（…すげーな、なんかこのヘンリー銃を持っているだけで、この銃のすべての事が何故か判るし、それに銃剣も近代兵器として認識されるみたいで、銃剣についてもどう扱えばいいのかも分かる、変な感覚だ）

真は今までの17年的人生の中でも感じたことのない感覚に、おちよつとばかり不安であった。

「うん…」

まあ、とりあえず、現在ソラがそんな360。どこから見ても軍人に見える真を鑑定していた。

「…真」

「ん？」

「…もうちょっとセンスのある真の世界の軍服とかない？」

どうやらこの世界の人々にとつて、現代の軍服姿は異様に映るようであった。まあ、現代日本でもこんな恰好して街中歩いたら、注目の対象になるだろうがな！－真は半ば悲しみながらそう思ったのであつた。

ダンジョンへの序章と、裏で進む陰謀（後書き）

作者は気の短い奴なので、感想＆評価がないと落ち込みます。

どうか、感想、評価、お気に入り登録、コメント、意見をください。

作者にとって、自分の作品が評価されるところのは、死ぬほど嬉しいことですから

ドゥギートールズ（前書き）

至極簡単な武器紹介

ヘンリー銃

1850年代後半にベンジヤミン・タイラー・ヘンリーが開発したレバーアクションライフルである。

アメリカの南北戦争において、正式装備ではないはずなのに、多くの北軍兵士に使われた銃である、

この銃の強みは銃弾の装填数が多いことである。

88式鉄帽

いわゆる軍用ヘルメット、鉄と書かれているが、鉄は使われておらず、耐弾纖維の複合素材で構成されているらしい、自衛隊の主要軍用ヘルメットである。

ボディーアーマー

いわゆる防弾チョッキと言われるもの、作中のは小銃の徹甲弾を停止させるNATO規格レベルVクラスのものである。

ダンジョン……それは、まさしく、ファンタジーの代名詞たるもの、モンスター、宝箱、冒険、魔法、と、ファンタジーならではの洞窟である。しかし……

「ぞひ」

と、何やらそのようなファンタジーな雰囲気を……

「あー」

ぶち壊すような奴は言った。

「まさか、米軍のボディーアーマーと、自衛隊の88式鉄帽と、ヘンリー銃をもつて、ファンタジーな世界において、90%くらいの確率で存在する定番中の定番、ダンジョンに行くこととなるとは……現実は物語より奇なり、というか、日本にいるときは想像もしなかつたけどな」

そう、真が言つてゐる言葉通り、現在真は、このファンタジー感あふれ洞窟を攻略するため、片手にヘンリー銃、背中に、予備の弾やダイナマイトが入つたりユック、ボディーアーマー、88式鉄帽を付けた、場違いにも程がある人間、山崎真が、そのファンタジー感あふれる洞窟、ダンジョンへと潜入を試みようとしていたのであった。

「……

真はとりあえず、あたりを見回した、目の前にはダンジョンの入り口とおもわしき高さ7メートル、幅10メートル位の洞窟があつた、そして、その洞窟の周りには、小規模な木で出来た言えなどが立ち並び、沢山の人やら、別の種族であふれ返つていた……しかも、どう

やらここにいる人達は、全員、ダンジョンに用が有る人なのか、剣やら槍、弓などで武装した人、ロープをまとった魔術師などがいた、銃で武装しているのは真くらうである、当たり前であるが…

しかし、とりあえず、やっぱり真の服装は目立つのか、所々その、ファンタジーな人たちがちらちらと、盗み見るように真を見ていた。

「なあソラ、ダンジョンってみんなこんな感じなのか？」

「違うわよ、確かに町の近くにあるダンジョンは大体こんな風に建物とかが立つて、人手に賑わうけど、全部のダンジョンがこんなでつかい洞窟形式じやないわ、モグラの穴みたいな場所が、ダンジョンの入り口だつた時もあるしね」

「ふん…」

真は、そんな感じに、ソラの言葉を聞いていたのであった。
数分ほど、歩いている、真たちの目の前に、なにやら、沢山の人だかりが見えて来た。

「ん？ソラ、あそこに大量の人混みが有るけど、なんだ？」

「なんだろう…私にも分かんない…だけど面白そうね、真、行つてみよう！」

「おう、いいぜ」

真たちは人混みめがけて突き進んで行つた。

わーわーと、真の目の前には、大量の人混みにあふれ返つており、いまにも、巻き込まれそうである、真はこの人混みを見ながら、夏口ミを思い出していたのであつた。

「あの、すいません」

真がそんな風に元の世界に思いをはせていると、ソラが「うやら、この人だかりは何なのかを聞いていた、聞く相手はどうやらエルフの男性みたいである

「ん？ なんだお譲ちゃん？」

「この人だかりは何ですか？」

ソラは未だに衰えを見せない、まるで津波の様な人だかりを指差しながらそう言つた。

「ああ、なんだお譲ちゃんたち知らないのか？ 今、Aランク級の称号を持つドゥットールズという、名パーティが来てるんだよ、お譲ちゃんも知ってるだろう？ とても強いドラゴンを倒したことで有名な…おつお譲ちゃん運がいいね、こっちに向かつて来たぜ」

エルフの男はそう言つと、どうやら、こっちに近づいて來たらしいドゥットールズとかいうパーティーの居るらしき方向を見つめた、真もAランクという高ランクを持っている奴つて、どんな奴らだ？ そう思い、眼を凝らしてエルフの男が見ている方向に目を向けた。

眼の先には、集団の中心に居るらしき五人の集団が居た、特徴を述べるとすれば、リーダー格なやつは、金髪と、青色の瞳の年齢としては20代位のイケメンな剣士で、エルフである、他には赤髪をボニー・テールにした「使いらしき人物や、他に魔術師っぽいのが一人、この魔術師たちは一人は女人の人で、もう一人は男だった、次は、でつかいハンマーみたいなのが持つた大男である。

「…」

（Aランクとなるとどれくらいの強さなんだ？）

そう思つた真は有言実行、さっそく彼らのステータスを表示させて見た。

名前 ????

種族 エルフ

職業 魔術剣士 冒険者

LV208

称号 ドラゴンキラー

「…やっぱりなんだよな」

真自身実は気になっていたことが有った、それは

「…ステータスが何故かソラの時みたいに、精密に測れないんだよな」

そう、真はこの街に入つてから、試しに他の人のステータスを見てはいたのだが、このように、何故か簡単な物しか分からぬのである。

「…ま、しようがない、諦めるしかないだろ?」

なつてしまつたものはしようがない、そう思った真は、それでやめた後、次に、赤髪のポーテールのステータスを見てみた。

名前 ????

種族 人間

職業 弓使い 冒険者

「…あれ」

なんだ? 真はそう思つた。

LV50

(隊長がLV208で従者がLV50って…なんかあまりにもの差があるのだが…)

それに、確かこのパーティはドラゴンキラーとか言っていたが、隊長しかドラゴンキラーの称号を持つていないので… 真はそう思つた。

「…

試しに、真は他の奴らのステータスを見てみた。

名前	?????????
種族	人間
職業	魔術師
	冒険者

LV56

これは、女魔術師のステータスである。

名前	?????????
種族	人間
職業	ハンマー使い
	冒険者

LV67

これは、あの大男のステータスである。

名前	?????????
種族	人間
職業	魔術師
	冒険者

LV70 データが改ざんされています。

「これは男魔術師のステータスである。

「…」

やつぱり隊長以外は称号、ドラゴンキラーの称号を持つていなし、なんでだ?パーティ全体で倒したのなら、全員が持っているはず、それに、このあほな程のレベルの差、何かおかしいな…あと、男魔術師のやつのレバと職業に、データが改ざんされていますとかある…謎は深まるばかりである。そのことを聞きたいという思いもあるが、まさか直接聞きに行けるはずもなく、ただ見守ることしかできるはずもしな…真はそう思った。

「ソラ、あのドゥットールズ?だつたか?…どいつう奴らなんだ?」
真は同じく、眼を凝らしながら、ドゥットールズを見ているソラに向かつて言った。

「うん、まあ聞いたことはあるわね、たしか、北の方にある、オスローテニアという町で、上級クラスのドラゴンを倒したチームとして、かなり有名よ、まあAランクの時点で、実力は相当なものだけど、まあ、一言で言えば、この世界でもトップクラスに腕の立つパーティなのよ」

「Aランクってそんなにすごいのか?」

「凄いも何も、Aランクはこの世界には100パーティ居るかいないかだよ、凄いに決まっているじゃない」

「…え?じゃあSSSランクは?」

真はAランクでそれなら、SSSランクはどうなっているんだと思いい、ソラに聞いてみた。

「…ああ、そう言えば行つていなかつたわね、SSSランクは一万年以上前に存在していたと言われる勇者だけが持つていたとされて

いるわ、勿論今はS S Sランクなんて持つている人はいないし、今存在する最高ランクの人物でも、Sランクが最高、それも、Sランクの人間はこの世界でも一桁くらいしかいないのよ

「…」

「どうやらギルドランクを上げるのは大変らしいと真は思ったのであつた。

「まあ、とりあえず、ダンジョンにさつあと行くわよ、それとも、ドゥシートールズのサインでもほしこの？」

「いや、別に欲しくはないけど」

「じゃあ、さつあと行こう！」

ソラはそう言つと、真ともにダンジョンに向かつて行つた。

「ねえヨセフ」

赤色のポーテールをした、弓使いの少女が言つた。

「なんだい＝＝＝」

隊長とおもわしき人物、金髪で青い瞳をした、エルフの男、ヨセフは言つた。

「あそこにいる男の子、超可笑しな格好してるんだけど、あんな格好初めて見るわ」

ミミと呼ばれた少女はちょっと笑いながら、その可笑しな格好をしている男の子が居る場所を指差した。

「ん？」

ヨセフは//が指差した方向に目を凝らした。

「…なんだあの服装は、そして頭にかぶつている可笑しな模様の丸い帽子、そして、抱えているのは鉄でできた奇妙な棒か？可笑しな奴だ」

「ねえ、可笑しな奴でしょ、どこの国の人間かな？」

「さあな、確かにあんな格好をした奴を、今まで数十年と旅をしてきた俺をもつてしても見たことがない、//、確かにお前の言う通り、可笑しくて変な奴らだ」

「盗賊かな？」

///が冗談下にそう言つ

「ふつ、盗賊があんな格好するかよ、盗賊でももつと合理的な服を着るわ、ふふ、まあ冗談はさておき、//」

ヨセフは少女の名前を言つた後、おかしな男を見るのをやめ、//の方向を向いた。

「あんなおかしな男など、俺たちにはどうだっていい事だ、それよりも今回わざわざこんな場所まで来た目的を忘れるなよ」

「分かつてゐるつてヨセフさん」

「それと…」

「ん？」

「あの昨日緊急的に俺たちのパーティに限定的に入つてきたあの男、ちょっとばかり怪しいな」

「ああ、魔術師のラテさんですか」

「そうだ、突然ギルドの上層部から、彼は今回、ドゥットルーズに限定的に入つて戦いを学びたい青年なので、一ヶ月間よろしく、といわれて結局入れざる負えなかつたのだが、なぜか、私の本能が怪しいと感じるのだ」

「そんな、考え過ぎですよ、ギルドの後ろ盾が有るし、たぶん、ギルドに多くの金を送つてゐる貴族の息子か何かでしょう、私たちはAランク、貴族にとつて、実力のあるパーティに息子を送りたいと

「…まあ、そうだな、俺の考え方か…」
ミセツは考え深げにそう呟いたのであった。

「…

「…まあ、あるでしょ？」「これまでもやつぱり事、有ったんですね」

ドゥッシュ・ツールズ（後書き）

次こそ…ダンジョンに突入させたい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9945x/>

現代的なもので、ファンタジーを旅する。

2011年12月21日15時49分発行